

男は、死体の上を歩いていた。

街の死体だ。壊れ、ひび割れ、朽(く)ちて、骨とわずかな肉が残った、街の死体だ。

男の足取りは重く、おぼつかない。

そのやせ細った全身は埃と砂にまみれ、襤褸(ぼろ)切れのような服はあちこちに血が滲み、さらに片足を引きずっているようだ。男はしっかりとした作りの黒い鞆を後生大事に抱えており、金で縁取りされたその鞆は男の格好に対して明らかに浮いている。

天に蓋(ふた)をしたような厚い雲の下、男は苦痛に喘(あえ)ぎながらも歩みを進めたが、ついには力尽きてその場に崩れ落ちてしまった。

男は、声にならない呼吸音を吐きながら、前方に投げ出された鞆に、ボロボロにひび割れた指を懸命に伸ばした。

男は、それきり動かなくなった。

数分もしない内に半分崩れて、鉄骨を剥(む)き出しにしたビルの中から新たな人影が現れた。

「やっつくたばったか」

その人影は亡骸(なきがら)となった哀れな男同様に薄汚れていたが、腰に錆だらけの雑多な工具を下げ、顔の半分が大きなゴーグルで隠れているという異様な風体であった。

彼は亡(な)骸(きがら)の傍にしゃがみ込み、おもむろに持ち物を漁り始めた。身に着けた装飾品、服のポケット、靴の中、金銭だけでなくわずかでも価値のありそうなものは全て懐に収めていく。何度も繰り返してきた行為なのか手際が優れている。そして彼は最後に、亡骸が指をさす鞆に手を付けた。

「こいつは……」

中身は雑に詰め込まれた紙幣の束。その中から一枚を抜き取り、砂除けのゴーグルをずらして太陽に透かし見る。太陽は今日も姿を見せることなく、薄汚れた雲の向こうでぼんやり光っている。軽い舌打ちと共に、まだ年若い目が訝(いぶか)しげに細まった。

「やっぱりか」

彼は一言だけ呟き、紙幣を無造作に元の鞆に投げ入れた。

鞆に詰められていたのは、かつてこの国で使われていた本物の旧札。少数ならまだしも、この量の金を扱うような組織でありながら旧札のまま大量に抱え込んでいるというのは、どうせろくな連中ではない。所々を血に染めた襤褸布のような風貌を見るに、この男もそういった連中のところから金を持って逃げ出してきた口だろう。何のためにそのような行動に至ったかはもはや知るべくもないが、こういう奴は珍しくない。それぞれ何らかの衝動に突き動かされて、どこかの組織の金を抱えて荒野に飛び出すのだ。先のこと何事も考えず、ただ感情に身を任せて走り出す。そんな奴らの末路は常に同じだ。

彼は冷めた目で鞆を閉じ、ゴーグルを再び身に着けた。

こういうブツの扱いも常に同じ。触るべからず。怪しいものには手を付けないのがこの死んだ街で生きていくためのルールだ。

男が歩いてきた方向に目を向ければ、遠くから砂煙が迫ってくるのが見える。直に組織の回収係がやってくるだろう。対象物に何もせず大人しく立ち去る限り、連中が自分のような蠅(はえ)に気を留めることはない。それが彼の確かな経験則だ。

「こいつと、こいつ……後はこの指輪で全部だな」

山積みのガラクタを背に、タンクトップ姿の瘦(や)せた老人がテーブルにばら撒かれた物品を一つずつ調べていく。男は埃臭い空気の中、その様子をただ黙って眺める。

しばらくすると老人は物品を傍の箱に適当に入れ、懐(ふところ)から皺(しわ)だらけの紙幣数枚を投げてよこした。

「これっぽっちか？ もうちょっとするだろ携帯端末とかさ」

「あれは回路まで劣化してて部品にもなりやしねえよ。腰に下げたものが飾りじゃねえなら、機械類は一度自分で調べてから持ってこいっていつも言ってるだろうが」

「なあ爺さん……」

男は食いが下がるが、それは老人の眉間の皺をさらに深めるだけに終わった。

「いいかシャイル、俺のところにガラクタ持ってくる死体漁り(スカベンジャー)なんて、てめえ以外に山ほど居るんだ。納得しねえってんなら他所行くんだな」

「……分かった、これでいい。これで満足するよ」

シャイルと呼ばれた男は肩を落とし、廃材で作られた粗末な小屋から外に出た。水分を失った風が頬(ほお)を撫(な)でる。

死体漁り(スカベンジャー)とジャンク屋の間にはある種の信頼関係が存在する。面倒なものを持ち込まない人間であると信用されなければ、取引すらさせてもらえない。金に換えることが出来なければ、集めたものにゴミくず以上の価値は無い。そして何も持たないこの男は信頼を時間でしか築けないが故に、幼い頃から通っているあのジャンク屋の機嫌を損ねるのはそのまま命取りになるのだ。

外は既に日が落ち、辺りに点在する錆びついた屋台の主人がランプに火を点し始めていた。収穫も大した金にならなかつたし、今日は屋台で何か安いものを買って帰ろうか。どこから仕入れたかもよく分からない食べ物ばかりだが、食えるだけマシだろう。そう考えたシャイルは帰途に就(つ)こうとして、ふと遠くを眺めた。

そこには光があった。星ではなく、もっと人工的な光だ。窓の明かりやハイウェイの照明、ネオンに立体映像(ホロ)などで造られる病的に鮮やかな小宇宙。彼にとってそれは日常の光景の一部であり、決して届かぬ桃源郷の光であった。

日夜輝き続けるあの誘(ゆう)蛾(が)灯(とう)は、常に周囲から人間を誘い続ける。

遠くから愚かな夢を抱えてふらふらと飛んできた者の内、その光の中に生きることを許されるのは、真に運の良いほんの一握り。運や実力の足りなかつた者たちや、その街のシステムから弾き出された者たちは、周囲に点在する廃墟群に地虫のように住み着いた。さらに運の無かつた者は、虫にすらなれずに荒野の中で朽ちていく。そしてそうした死体から持ち物を漁るのが、彼の仕事であった。尊ぶべき死者に蠅のようにたかるこの男のような者たちを、人々は侮蔑を込めて死体漁り(スカベンジャー)と呼んだ。

シャイルの朝は一匹の鼠(ねずみ)から始まる。

彼が寝床にしているバラック小屋は小ぶりな岩山を背にしており、そこには鼠が幾つか巣を作っている。故に特に金が無い時には貴重なタンパク源として利用しているのだ。どんな病気を持っているか分からないし間違いなく体に悪いだらう。だが、火を通せば問題無いと男は信じているし、何より物心ついてから病気になったことなどほとんど無かつたので特に心配はしていなかつた。ずっとこうやって生きてきたのだ。

「……不味い」

それでもまともな食べ物ではない自覚はあるし、もっと良いものを食べたいと思ったことは数え切れないほどある。しかし死体漁り(スカベンジャー)の収入は低く、新しい死体が絶えず供給されるとはいえ一定の水準で安定しているわけでもない。何か技術があればこの生活から脱却も出来ただろうが、何も持たないシャイルがこれから得られるものなど無い。

昔からそうだった。物心ついた時には、親でもない死体漁り(スカベンジャー)の男に最低限の仕事のやり方だけ叩き込まれて日夜働かされ、何も与えられることはなかつた。まだ幼い頃にその男が熱病を拗(こじ)らせて何も残さず死んでからは、二十数年間ずっと一人で死体を漁りながら生きてきた。シャイルは生きる術をそれしか知らず、明日をも知れぬ生活の中でそれ以外のことを覚える余裕などあろうはずもない。進化や成長というのは、それが出来る余力を持つ者の特権なのだ。

いつも通り工具を吊るしたベルトを締め、砂除けの大きなゴーグルを身に着けたシャイルは、バラック小屋を後にした。

ネオン煌(きら)めく中心街を遠望するこの地域には、死体が発生しやすいポイントが幾つ也存在する。昨日訪れた砂地もその一つであり、一見ただの平地だが適切な対策をしなければ風に巻き上げられた砂が

絶えず体力を奪っていく。そうした生者に厳しい地帯こそ、彼にとっての狩場だ。そうでなくても突然強烈な砂嵐に見舞われることもあり、この地域に生者に厳しくない場所など元々存在はしない。

とはいえ、近頃ろくに稼げていない分、新しい場所も開拓していかなければいよいよ水も買えなくなるかもしれない。そう考えて、彼はいつもと違うルートで巡回を始めた。

市場、住宅街、工業地帯、その全てに元がつく枯れた風景の中を、彼はただ一人歩いていく。死体やいずれ死体になりそうな人間、あるいは盗賊の類(たぐい)に常に目を配りながら足を進めていく。彼の仕事のほとんどの割合は、こうした不毛な散策が占めている。

そのまま数時間ほど歩いたところで、岩山の集団に行き当たった。鋭く切り立ったコンクリートの岩山だ。

ここは各地にある廃墟群の中でも他と比べて特に破壊の激しい地域であり、そこら中が巨大な瓦(が)礫(れき)で埋まっているために住むどころかまともに歩くこともままならない。他より廃(はい)墟(きよ)の密度も高いことから、かつては栄えた街だったのだろう。しかし多くの人が集った大きな建物群は、今では人を遠ざける険しい溪谷を作り出している。故にここには地元の間人も寄り付かないし、外から来た連中も好き好んでこのような瓦礫の中を突っ切ろうとはしない。そして死体の元である人間が立ち入らない以上は、普段なら彼も用の無い場所であった。

「でも……一応入ってみるか。一応、な」

シャイルは岩山に分け入っていく。こういう人の寄り付かないところだからこそ、隠れた宝でもあるかもしれない。そんな自分でも信じてないような希望と、今後生きていくために何か新しい場所を見つけなければいけないという焦りが、彼にそれを選ばせた。

それからしばらく、幾つもの岩山と格闘しながら探索を進めていく。瓦礫を乗り越えてもまた瓦礫。あるいは原型を留めない鉄くず。人影どころか雑草すら見つからず、単調な景色の中でいたずらに時間と体力が削られていく。

じつりと汗ばむ顔を上げれば、瓦礫の向こうに大きな影が見える。蛹(さなぎ)を縦に置いたようなその姿は砂煙に霞(かす)み、何のための建物なのかは皆目見当もつかない。しかし、どこも同じような瓦礫と廃墟に埋め尽くされたこの場所では、あれが方角を知る唯一の目印になる。もっとも、中心街の間人が今も管理していると言われていることからあそこに近寄る者はおらず、彼自身この廃墟群を越えることなくある程度探索したら引き返す心づもりであった。

「来るんじゃ、なかった……もう帰りたい……」

行くも戻るも体を傷つけていく針山地獄に嫌気が差してきた頃に、彼の足元に突然『それ』が現れた。瓦礫の中にぽっかりと空いた空間と、その中心に横たわる死体である。

元々地下室か何かであろうその空間は広く、周辺に転がる大小様々の瓦礫以外はただ死体のみがある。

「これは……当たり引いたかな……！」

半ば諦めていた獲物が唐突に現れた喜びに男の煤(すす)だらけの口元が緩み、それまでの疲労を全て忘れてしまったかのように勢いよくその空間に駆け下りていった。汚れたブーツで降り立った床が硬質的な音を鳴らし、長い眠りから覚めた空気が流動を始める。

男は固く平坦な床を確かめるように何度か踏みしめ、その空間を見回した。

床材は外の廃墟群ほど激しく劣化していない。またその上に積み重なる埃は風に運ばれる砂(さ)塵(じん)とはまた異なり、この空間がいかに長い間外界から隔離されてきたかを伝えている。一方でこの地下空間を囲む瓦礫の断面はまだ新しい。ここを覆っていた瓦礫の山が、積み重なる風と時の侵食に耐え切れなくなって崩れ落ちたのがつい最近の話であると推測できる。こうした廃墟の一通りの見分も、この荒野で生きていくのに必要な技術の一つだ。出来ない者は遅かれ早かれ廃墟の崩落に巻き込まれることになるだろう。

そしてその中央には、行儀良く手足を揃えた死体が静かに安置されたかのように横たわっている。身に着ける衣服や持ち物はその死体がかつて少女、それも中心街で暮らすような裕福な娘であったことを示している。しかし死体そのものは既に白骨化しており、生前の面影を窺(うかが)い知ることはもはや出来ない。

時が止まったような地下空間の中、崩れた天の穴から濁(にご)った光が死体を照らす。両手を体の上で組んで眠るその骸(がい)骨(こつ)を見て、彼は死体を漁ることに初めて躊躇(ためら)いというものを感じた。

「それでも……生きるためだしな」

呼吸をひとつ。男は気合を入れ直し、いつも通りの作業に取り掛かった。

その少女はあまり多くのものを持ってはいなかったが、その衣服から何から何まで、少女の持つものはどれも一見して上等なものだと分かる。薄いピンクのワンピースは、ボロボロになっているものの素材からして上質なので布としてなら十分売れるだろう。頭(ず)蓋(がい)骨(こつ)の近くに落ちている小さな花のあしらわれたイヤリングは、よく見れば花びら一枚一枚に異なる宝石がはめ込まれている。仮に人工でも相当の金になりそうだ。そして指の骨に引っ掛かっているのは指輪型の携帯端末。ジャンク屋に置いてあるカタログでちらっと見かけた覚えがある。確か、数十年前の型でありながら、今なお高い値のつくような部品が多数詰め込まれた一品だったはずだ。最後には猫を模(かたど)った飾りを持つネックレス。行儀良く座る猫の形をしているが、無骨な厚みと重さが少女のアクセサリーにしては不相应な存在感を放っている。もしかしたら見た目以上の価値があるかもしれない。

彼は金になりそうなものを粗方剥ぎ取り、手早くバックパックに詰め込んでいく。

「来た甲(か)斐(い)はあったかな……」

仕事を終えたシャイルは、もう一度亡骸に目を向ける。少女の記憶を残す遺品を全て奪われたその哀れな骸骨は、もはやこの世界に無数に転がる名無しのそれと区別がつかない。少女を照らしていた光は既に陰り、発見した時に纏(まと)っていた聖性は失われた。それでも彼は、ぽっかり空いた少女の眼窩(がんか)から目を逸らすことが出来なかった。

「……安らかに」

耐え切れぬように言葉を絞り出し、男はどうか苦しげに背を向ける。

「嫌な仕事だ」

鉛のように重い足を持ち上げ、ゆっくりと歩き出した。また明日も生き続けるために。

死体とは鉱脈であり、生きる糧(かて)である。

だから見つければ金目の物を篡奪(さんだつ)するし、それを悪いと思ったこともない。死者の尊厳を気にするような繊細さは命取りになりうるからだ。その認識が変わったことは無い。きっとこれからも変わることは無いだろう。しかし、物言わぬ少女の空虚なまなざしは、彼の心に呪(じゆ)縛(ばく)じみて残り続けている。

「安らかに、だとさ」

死体にそんなことを言ったのは初めてだったし、己の中にそんな言葉があるとは彼自身思っていなかった。ただ、あの時はそうしなければ死体に背を向けることすら適わなかった。そんな気がした。

瓦礫の山は帰りも変わらず体を痛めつけたが、少女のまなざしに縛られた心は内面へと沈み込んでいく。思えば、毎日のように死体と接していながら、あの時初めて『死者』を見たのかもしれない。

すっかり夜の帳(とぼり)が下りる中、少女が眠る地下の墓地は再び静寂の中に息を止めようとしていた。

その時、闇を一条の光が切り裂いた。

普段は周囲に何の灯りも無い岩山の夜空に、人工的な光を点した鉄(てつ)塊(かい)が近づいてゆく。つるりとした流線形のそれは、徹底した破壊の爪(つめ)痕(あと)を残す街の残骸にサーチライトを投げながら静かに低空を飛行してきていた。刺すような光がぽっかりと開いた地下空間を見つけ出すと、それはわずかな駆動音を響かせて滑るように地面近くに降下していく。

底が地面に擦(こす)る程の高度になったところで、排気音と共に扉が開く。降り立つ数人の男。そのうち一人は丸々と太っており、身に着けているスーツも他と比べて明らかに上物だった。彼の部下と思われる男たちは地上に降り立つと共に、ライトを携えて少女の亡骸に駆け寄っていく。

「……こりゃどういうことだ」

太った男が苛立たしげに唸り、周りの男たちは困惑したように顔を見合わせる。

「それが……」

「なんでガイコツだけなんだ……？」

静寂に満ちた空間で、誰かが唾を飲み込む音が響いた。

「その……何者かに身包み剥がされたものと……」

みるみるうちに怒気を立ち昇らせていく太った男に、他の男たちの一人が恐る恐る答えた。

その瞬間、男の怒りが爆発した。

「見つけたっつたよなあ！ あの日の格好と同じ死体を！」

彼は怒りに任せて部下の胸元を掴み、唾(つば)を散らしながら怒鳴りつけた。

「たっ、確かに昼間に無人偵察機(アスフル)で見つけたんです！ 最近新しく崩落したであろう箇所に横たわっているのをしっかり確認しました！ ですが……見つけてからここに来るまでの間に、恐らく……」

部下は身を縮こまらせ、命乞いをするかのように弁明を続ける。

太った男はしばらく拳を震わせて黙り込み、乱暴に部下を開放した。

「お、恐らく死体漁り(スカベンジャー)の連中かと思われまますので！ 我々が！ すぐにでも近辺の搜索を」

その瞬間、部下の言葉に割り込んで、物が壊れるような大きな音が辺りに鳴り響いた。

「クソが……まただ！ またこの女だ！」

続いて二度、三度と破碎(はさい)音(おん)が響く。

「またこの女が邪魔しやがる！ あの時だって！ こいつさえ邪魔しなけりゃ俺は……俺は……！」

四度、五度、六度、怒り狂った男が足を振り下ろす。

背後の鉄塊が放つ人工的な光に照らされ、少女の亡骸は徐々にその形を失っていく。

死者がモノでしかないこの荒野に、それを咎(とが)める者は誰もいない。

あれからどうやって帰ってきたのかよく覚えていない。

ただでさえボロボロだった服はさらに汚れと傷を増やし、疲れた体は粗末な寝台に伏せたまま鉛のように動かない。

目が覚めてからシャイルは、寝台の上で色々なことを考えた。自分のこと、人生のこと、仕事のこと、そして、死んだ姿しか知らない少女のこと。

当然こんな輪郭のおぼつかない問いに意味などあるはずもない。しかし、これは彼にとって初めての経験だった。これまでは死体の遺品と今日の食事の算段だけを考えて生きてきて、『生きる』以外のことをこんなに考えたことなどなかったのだ。

「……腹が減った」

慣れないことをして痛んだ頭を抱えて、のっそりと動き出す。

外を見ればもう夜と朝を飛ばして昼になっているようだった。どうやら丸一日こうして倒れ伏していたらしい。

彼はぼやけた頭で考える。色々と考えてはみたが、空きっ腹以上のものは得られない。結局のところ今日を生きるためにやることはいつもと変わりはないのだ。

「爺(じい)さんのとこに売りに行かなきゃな……。しばらくはもうちょっといい暮らしが出来る金になるかもしれないし……」

まずは金を手に入れて、飯を食おう。

豆と人工肉の温かいスープにオートミール、角砂糖数粒にゴミ一つ沈んでいないコップ一杯の浄水。彼の行動範囲内で食べることの出来る、最上級の食事だ。ここは彼が知る中で最も高級な料理店で、店構えも廃墟の再利用などではないまともな建築物だ。格好は襤褸着のままだったため店員は顔を顰(しか)めていたが、そんなことを気にするつもりは端(はな)から無い。ともあれ、屋根があつて座れる店でこんなまともな食事が出来る日が来るなど思っていなかった。

そして、持てるだけ買った水や保存食を抱え込んで帰宅する。流石にあんな贅沢は続けられないが、それでもこれで当分の間は家でも人間的な食事にありつくことが出来そうだ。それもこれも普段しない冒険をやってみたお陰だろう。初めて味わう生活の安定に彼の気分は高揚し、珍しく笑みすら浮かべていた。

その時、ふと寝台に無造作に放つてあるネックレスが目に入った。少女が持っていた、猫を模ったネックレスだ。あの時の収穫品は粗(あら)方(かた)ジャンク屋に売ったが、何故だかこれだけは妙に気になって手元に残してあったのだ。

何となく、それを手に取って弄(もてあそ)ぶ。

シルバーのチェーンに繋(つな)がった、シンプルな猫のシルエット。この手のアクセサリーにしては妙に厚みがあり、側面は幾つもの溝が刻まれていてデコボコしている。

ずっと気になってはいたが、その正体は結局まだ分かっていない。ジャンク屋に持っていけば何かは分かるだろうが、その代わりに売る羽目になるのは目に見えている。それだけは避けたかった。それにジャンク屋の老人も持ってくる前に少しは自分で調べろと言っていたことでもあるし、行き詰(づま)るまでは自分で色々弄(いじ)ってみてもいいかもしれない。そう考え、シャイルはネックレスを調べ始めた。

変化は思っていたより早くに訪れた。

側面の溝や出っ張りを弄(も)り回していたところ、突然上面の猫が蓋のように開いたのだ。

「うわっ！」

驚いて寝台に落とすと、その猫はわずかな駆動音を出し、側面の溝が淡く光り始めた。

爆弾を前にしているかのように警戒して遠巻きに見つめていると、次の変化が起こった。

蓋が開いたところに埋め込まれた、水晶のような球体が光を放ち、数センチ上空に薄く光る小さな板が現れる。

突然の連続でフリーズしていた脳が次第に回復し、現状を把握しようと努める。目の前の光る板は、文字や図形を映し出しているようだ。

「立体映像(ホロ)か……！」

淡い光を帯びて浮かび上がる、実体の無い電子の幽霊。

彼自身、これを間近で見るとは初めてのことだった。もちろんそういう技術が存在しているのは知っているし、中心街では一日中立体映像(ホロ)の広告が煌めいている。ただ、彼が住むのは未だに火で暖を取るような世界であり、そんな技術の結晶はここの人間にとって天上人の領域でしかなかったのだ。

もう一度猫を手に取り、よく観察してみる。

開いた蓋の下にはレンズが埋め込まれており、そこから映像を投射している。浮かんでいる板は手のひら大で、どうやら操作パネルのようだった。

「これが起動で……これは選択か？」

表示された文字を読みながら、恐る恐る手を伸ばして操作を始めた。初めは手つきもぎこちなく何度もミスをしていたが、次第に要領を掴み操作を覚えていく。例え普段の生活がローテクの極みであろうと、ジャンクを扱う死体漁り(スカベンジャー)は馴(な)染(じ)みの無い技術でも適応するのが早い。

何度か操作を繰り返す内に、この機械の正体が分かってきた。要するに、映像を撮影するカメラなのだろう。どの部分からどうやって撮るのかは分からないが、周囲の光景を記録し、立体映像(ホロ)として空間に投影するのだ。画面のデザインや文章の雰囲気から見るに、家庭用に作られたものだろうか。

ふと、好奇心が首をもたげた。

「何が入ってるのかな……」

どうせ使う当ても無いし、正体が分かったなら売ってしまおう。普段ならそう考えたはずだ。しかし腹が満たされて心に余裕が出来たからなのか、どうしても余計なことが気になってしまう。食い物はしばらく持つ程には買い込んであるし、中身を見てから売りに行っても遅くはないだろう。そんなことを言い訳めいて考えながら、彼は操(そう)作(さ)盤(ばん)に指を伸ばした。

すると、四角く切り取られた幾つもの画像が一気に展開され、彼の周囲を覆(おお)うように配置された。画像には日付が添えられているが、どれも数十年前のものだ。ここまで小型の投影機があるとはと感心していたが、どうやら既に昔の技術になっていたようだ。

少しの間画像群を眺めた後、彼はその中で最も古い日付のものにおもむろに触れた。

その瞬間、投影機の水晶がより強く輝き、部屋を明るく照らし出した。それだけではない。周囲の光景が塗り替わっていく。廃品だらけのあばら家から、上質な調度品が並べられた清潔な部屋へ。

『えーっと……これでちゃんと映ってるのかな』

目の前に、少女が現れた。

「うおっ！」

思わず投影機を取り落としてしまったが、全体に一瞬ノイズが混じった後はそのまま映像は続いている。よく見れば輪郭は若干ぼやけており、それが単なる映像であることは理解できる。ただ、それでも彼女が動くとき避けてしまう。それだけの存在感があった。

『あのね！ 今日誕生日だからずっと欲しかった最新式のホロカメラをお父さんに買ってもらったの！』

嬉しそうにはしゃぐ彼女の歳の頃は十二歳か十三歳か、その辺りだろうか。髪はよく手入れされたブラウンのロングヘアで、好奇心に輝く大きな目は翡翠(ひすい)の如(ごと)き美しい緑色。これが、あの骸骨が生きていた頃の姿か。そう思うと、ぞくりと背筋が寒くなる。過程は分からずとも、自分はこの無邪気な少女の末路を知っているのだ。

『だから、今日からこれを使って毎日映像を撮っていこうと思うの！ せっかく買ってもらったんだからいっぱい使いたいし、毎日必ず記録を残すって日記みたいで楽しそうじゃない？』

『いつものよくあることでも、そうじゃないことでも、こうやって映像に撮ってみれば、変わらない毎日もきっと楽しみで素敵になるわ！』

彼は、目の前で喋(しゃべ)る少女に見入っていた。彼女の笑顔が、考え方が、振る舞いが、荒(すさ)んだ世界に生きる彼にとって彼女の全てが鮮(せん)烈(れつ)なまでに輝いて見えたのだ。

『そうだ、自己紹介を忘れてた。まあ誰に見せるものでもないんだけど、何かを作る時は人を意識した方がいいものになるって言うしね』

『あ、でももしかしたら本当に誰かがこれを見るかもしれないわね！ 私がいなくなったずっと後に見つけてくれるかも。そう考えたらなんだかわくわくするわ！』

それが、彼と少女の出会いだった。

『私の名前はレイ・A・カーレッド。こんにちは、未来の誰かさん！』

『それでね、お姉ちゃんたら酷いのよ！ 私がせっかく作ったクッキーを甘すぎて歯が溶けそうなんだよ！』

『あれくらい甘くないとお菓子じゃないわ！ 今度はケーキを作ってリベンジしてやるんだから！』

『……こほん。それじゃあ今日はここまでにしてもう寝るわ』

少女がこちらに手を伸ばし、映像が終わる。白とピンクを基調にした可愛らしい部屋の幻影がぼろぼろと崩れ落ち、錆びた寝台や蜘蛛(く)の巣が張った粗末な棚が姿を現した。彼はそのまま何も言わず手慣れた様子でパネルを操作し、次の映像を投影させる。

『こんにちは、レイよ！ 今日ね、学校ですごく面白いことがあったの！』

映像を見ながら、保存食を口に運ぶ。パックに小分けにされたペースト状の物体はぼんやりとした味で、薬品の臭いが鼻につく。何が使われているかもよく分からないが、保存性と腹持ちはずば抜けている。ただ空腹に流し込むだけならこれほど便利なものは無い。

あれから彼は、ろくに外も出ずにひたすら映像を見ていた。不作だった時のためにと買い込んだ保存食は次々と消費され、時折思い出したように水を買って出かける度に臨時収入が嵩(かさ)を減らしていった。ひとつひとつは時間にしてそこまで長いものでもないが、膨大な数を一から見ているため、映像を見ることが彼の生活の中心になっていた。

彼女の話はどれも新鮮だった。家族の話、学校の話、友達の話、何もかもが彼にとって全く別世界の話であり、楽しそうに語るその話を聞くほどに彼の生きる世界の空虚さが浮き彫りになるのを感じる。

砂と廃墟と死体。それがシャイルの世界の全てだ。渴きひび割れた大地をただひたすら這いずり回り、死んだ人間を見つけては遺物を剥ぎ取る。朝起きるとそれだけに日中を費やし、夜になれば隙(すき)間(ま)だらけのボロ小屋の中で震えて眠る。劣悪な環境に蝕(むしば)まれた体が少しずつ壊れていくのを感じながら、彼はずっと一人でその日常を繰り返してきた。そして今、改めて感じてしまったこの現実から逃れるように、再び甘い異世界に溺(おぼ)れていく。

映像でずっと少女の生活を追う内に、彼女について色々なことが分かっていった。その一つとして、少女、レイはあの摩天楼が聳(そび)え立つ中心街に住んでいたらしい。それだけなら予想の範疇(はんちゆう)なのだが、レイの父はエネルギー系の大企業を経営しており、中心街でもさらにほんの一握りの大富豪という話だった。その規模は中心街が消費する電力の半分を握るほどであり、本社ビルは彼の暮らす僻(へき)地(ち)からも見ることが出来る。選ばれし者だけが入ることを許される、常に電子の光が煌めく不夜城。その電源を所有する一族なのだ。もしかしたらとんでもない御令嬢の死体を漁(あさ)ってしまったのかもしれないと、彼はほんの少しだけ怖くなった。

『勝手に甘やかしたのがお父さんにバレたら叱(しか)られちゃうからって、お義兄さんが内緒で新しいイヤリング買ってくれたの！ 花びらの小さい宝石が本当に素敵！』

『お友達と遊びに行く時にこっそり着けようかしら！』

映像を見始めてから何日経っただろうか。もしかしたら何週間か何か月か。いや、何年も経っているかもしれない。少なくとも彼の見守るレイの世界はそれくらい経っている。幼かった少女も徐々に女性らしく成長していき、それを見るのが嬉しくて、どこか寂しくもあった。

『あの優しいお義兄さんならお父さんの後を立派に継(つ)げるでしょうね。私も結婚するならあんな感じの素敵な方がいいわあ』

『……私もいつか縁談のお話とか来るのかな……』

今や、彼は少女の多くを知っている。まともな教育を受けたことすらないが、彼女の好きな教科に苦手な教科、教師の性格は分かる。見たこともないお菓子を売る屋台の主人は女性にねだられると簡単に値引きしてしまう軟派な男で、最近駅前に出来たお酒(しや)落(れ)なカフェは名物が午前中に売り切れてしまう人気店だ。彼女の語る光景の全てが鮮烈で、言葉のひとつひとつがひび割れた荒地に水滴を落とすより早く心に染みわたっていった。彼が継(すが)る電子の幻想は、砂と死体が転がる乾いた世界なんかよりずっと彼にとってのリアルだった。

毎日だったはずの日記が、成長するにつれ間隔が空くようになったのは寂しいことだが、それでもなお、彼にとってはレイの世界が全てだった。

映像の中の彼女に、ある変化が起きた。あれだけあった映像が残りわずかとなり、全て見終えたらどうするかを真剣に考え始めた時のことだった。

『その……今日はとても良いことがあったわ。なんだか心がふわふわして、今でも現実感が無いのだけれどね』

未だ少女のあどけなさを残しながらも美しい女性に成長したレイが、その幻が、目の前で恥ずかしそうに笑顔を浮かべている。

曰く、恋人が出来たらしい。相手は父親の部下、すなわち父の会社に勤める会社員だ。彼女とは歳が離れているものの、若くして役員まで登り詰めた才能ある出世株なのだそう。親の紹介ということで初めは彼女もあまり乗り気ではなかったが、そのカティアという名の男の積極的なアタックと人柄に次第に心を許していき、正式に交際する運びとなったという。

遠く臨む中心街に住まう一人の令嬢の交際。それも数十年前。本来なら、彼が関心を払うはずのない出来事であった。彼の生きる場所は結婚という制度自体がまともに機能しているかも怪しく、女性すらここ何年も見かけないような土地だ。だが今の彼にとっては間違いなく一大事であり、何故だか酷く胸が騒いだ。

今やレイの喜びは彼の喜びであり、レイが怒った時はその矛先に対して同じく怒りを抱くこともある。だからこそ今回の交際も喜ぶべきだし、相手の有望さを考えれば、この男と一緒にいれば将来きっと幸せになれるだろうと安心するのが普通だ。ただそれでも、ずっと見てきた少女が誰かの元へ行ってしまふのはどうにも寂しく、同時に心の底では得体の知れぬ不安が渦を巻いていた。順風満帆な人生を歩むはずだった少女が、何故あんなところで骸(むくろ)と化していたのだろうか。

『軽く塗っていったリップにも気付いてくれてたみたいでね、その色によく似合うからって可愛いワンピースをプレゼントされちゃった！』

交際報告の日から、日記の頻度が一気に上がった。最初毎日だったはずの日記も成長するにつれまばらになってきていたというのに、その日からはほぼ毎日のように記録を残している。内容も大きく変わり、その日あったことなどが主な話題であるのは同じでも、今ではそのほとんどが恋人絡みの話だ。

二人であんなところに行った。一緒にあれを食べた。映画を見た。他愛もない会話をした。そんなことを嬉しそうに話す彼女を見るのはいつもと変わらず楽しいことだったが、それでもやはり心には小さな棘(とげ)のようなものが刺さったままで、彼にはその気持ちの正体など見当もつかなかった。

『それでね、お母さんたらすっかり彼のことを気に入っちゃって、私の彼だって分かってるのかしら！』

親の紹介なのだから当然と言えば当然なのだが、恋人、カティアは家族からの覚えも良く、交際はまさに順調そのものだった。あばら家に投影される幻の彼女はいつも幸せそうで、カティアは家族にすっかり馴染んでいて、その光景は、欠けの無いパズルのように美しく完結していた。優しい両親に仲のいい姉、優秀な義兄によく出来た恋人。シャイルは家族を知らないが、これが完璧な家族の形なのだろうと思えた。

映像が終わった。日記はあと数日分しか残っていないが、結婚を機に止めたのだろうか。

彼は、これまで何度も繰り返したのと同じように、再生マークに指を伸ばした。だが少し考えて、その手をもっと下、投影の始点まで下す。

「目が、疲れたな」

ずっと上がりっぱなしだった蓋に指をかけ、丁寧に閉じた。

電子の虚飾が崩れ去る。

錆びた寝台。拾ってきた歪(ゆが)んだ棚。廃材で作った机と椅子。ガラスの汚れ切ったランプは不規則な明滅を繰り返し、隅に積まれた保存食の空き容器には虫が集(たか)っている。見慣れた死体漁り(スカベンジャー)の巣に、数日ぶりに帰ってきた。

古びた機械のように、ぎしりと少しずつ体を動かす。長時間まともに動かなかったせいか、寝台から立ち上がると体が軋(きし)んで悲鳴を上げた。少し迷って、ネックレスを首にかけて外に出る。空にはいつものように薄く雲が敷き詰められており、乾いた風が運ぶ空気は埃(ほこり)臭い。変わらない風景で、変わらない臭いだ。

ずっと閉じこもって映像に没頭して、電子機器が映し出す少女の人生を追って、その浮き沈みを自分のことのように一喜一憂してきた。だが結局のところその少女はとっくの昔に死んでいて、周囲の環境が何かひとつでも変わるわけでもない。彼は、砂煙に霞む摩天楼をぼんやりと見つめて、息をひとつ吐(は)いた。

「いつの間にか、風が強くなってきてたんだな……」

もしかしたら、近い内に砂嵐が来るのかもしれない。荒野の向こうから時折やってくる、酷い砂嵐だ。

そこには灰色の壁がそそり立ち、果てなく広がるその端を見ることは適わない。壁には同じ灰色の巨大な扉が一つあるが、その金属的な質感は扉を壁より一層頑丈そうに見せた。

シャイルが扉に近づくと、付近に立っていた複数の人影の内、一人が歩み寄ってきた。

「入門希望者ですか？ 市民ID、もしくは管理権保持者の許可証はお持ちでしょうか」

その人影はごつごつとした拘束具のような衣服で全身を包み、顔はつるりとした表面の真っ黒なフルヘルメットで覆われていて表情は窺(うかが)えない。後ろに控える者たちも同様の格好であり、彼らはみなここを守る門番なのだと分かる。

「いや……IDは無い。ただ、近くに來ただけだ」

男がそう答えると、門番はそれまでの礼儀正しい態度をあからさまに崩した。

「じゃあ大人しく帰れ。貴様みたいな虫が用も無く壁に近づくな」

「分かってる。悪かったよ」

「チッ、だからあんなのに質問する必要なんかねえって言ったんだ俺は……」

ヘルメット越しにも分かる侮蔑の視線に、彼はゆっくりと背を向けて壁から離れた。

市民IDとは、この壁の向こうに住む人々に与えられた識別コードである。IDを持つ者のみが壁の向こう、すなわち中心街に入る許可を与えられ、中では人としての様々な権利が保障される。要するにIDは人間の証であり、持たざる者は虫と変わらない。

ここは、中心街と外側の境界だ。街をぐるりと囲む堅(けん)牢(ろう)な壁が、人間の世界を区切っている。中心街の技術の粋(すい)を集めたこの壁は、気圧を制御することで上部に空気の壁を作り、外界の砂や汚れた空気から遮断された快適な環境を維持し続ける役目を担っている。壁のこちら側と向こう側で、まさに住む世界が違うのだ。そして目の前にある巨大な門は、幾つかある搬入口の一つである。遠く離れた他の街との貿易によって運ばれた物資は、ここを通過して運び込まれる。横には小さめの通用口もあるが、どちらだろうと人間以外に通行が許されることはない。

どうしてこんなところに来てしまったのかは、シャイル自身にもよく分かっていなかった。ぼんやりと外に出た後そのまま惹かれるように何となく歩き始め、行き会った車に金を握らせて長時間揺られてここまでやってきたのだ。本当に虫みたいだ、と自(じ)嘲(ちよう)する。

入れると思ったわけではない。少女の白骨死体まで戻れば体内に埋め込まれていたであろうIDのチップを探すことも出来たが、IDは本人情報に紐づけされているためどちらにしる門番に弾かれていただろう。最悪の場合何らかの容疑をかけられて罪人として街に入る羽目になっていた可能性もある。越境を試みる無謀な連中は後を絶たず、そうしたシステムの知識は嫌でも入ってくるのだ。

だから、壁を越えたかったのではない。

「この向こうに……居たんだよな……」

結局のところ、これだった。

死んだ少女に勝手に情が移って勝手にもやもやして、それでもなお彼女に近づきたかった。大(おお)雑(ざつ)把(ば)に言ってしまうとそれだけの、自分で考えても馬鹿馬鹿しい話だ。彼女の生きた場所に行って、彼女の見た景色を見たいと、そう思ってしまったのだ。例え中に入れなくとも、近くに行きたかった。理由など自分でも分かっていない。ただ、既に隔絶された遠くへ行ってしまった少女の影を追い求めて、せめて何か彼女の痕(こん)跡(せき)を見つけないかという衝動に背中を押された。

わざわざやって来て結果的に彼女に近づけたかどうかは、彼自身とても肯定できるものではない。ただ、ここまで壁に近いと、遠くから見えていた中心街の光は却(かえ)って何も見えなかった。

「遠いなあ、畜生……」

垂れ込んだ雲の向こうで日が沈んでいく。

この辺りが潮時だろう。夜になればただでさえ悪い治安が一層悪化するし、何より足が無くなる。そう考えて、彼はようやく壁に背を向けて歩き出した。

周りを見れば既に人影はまばらだ。安定した収穫が見込める壁の周りを縄張りにする同業者は多いと聞くが、彼らの姿もほとんど見えない。急いで足を探さなければいよいよ帰れなくなるかもしれない。彼は足を速める。

「しかし久しいなシャイル、二年ぶりか？」

高速で荒野の風景が後ろへ飛んでいくのを眺めながら、シャイルはその嘎(しやが)れ声に頷いた。

壁を後にしたシャイルは、帰るための足を探していたところ、運よく知人の車を見つけて金を払って同乗していた。知人といっても大した交流は無く、何年か前まで縄張り争いをしていた程度の仲ではあるが。

車は外装の大部分が剥(は)がれ落ち、錆びたフレームが所々で顔を覗かせている。もちろん乗り心地が良いはずもない。リゲルという名のその知人曰く、二年ほど前に事故を起こしているのを偶然見かけ、まだ息があった持ち主を黙らせてから修理しながら使っているのだそうだ。車のような移動手段の入手というのは、死体漁り(スカベンジャー)にとっては仕事の効率化と探索範囲の拡大を意味する。かつて対立していたシャイルを快く同乗させたのも、チンケな縄張り争いをする必要が無くなって稼ぎが良くなった余裕から来ているのかもしれない。

「バティ、って覚えてるか？ 昔俺たちがいた辺りの近くで死体漁ってたノロマな奴なんだけどさ」

運転しながら、リゲルが突然話を振ってきた。正直覚えていない。死体漁り(スカベンジャー)なんて次々と新しい人間が入ってきて簡単に消えていく業界である。そう何人も名前を覚えていられない。

だがリゲルは構わず話を続ける

「あいつ縄張りを別のところに移してたんだけどさ、この前近くを通った時に様子を見に行ったら、死んでたよ」

「死んでた？」

「あいつ間抜けだから上手く稼げなくて、漁った死体食ってたらしいからな。変な病気にでもなったんじゃないかねえの？ あいつの死体と家も軽く漁ってみたけど、飯代にもならなかったな」

リゲルは事も無げにそう言ってのけた。

よくある話だ。貧しさに耐えかねて人食いに手を出すことも、怪我や病気のひとつでゴミのように死んでいくことも。シャイルが映像で垣(かい)間(ま)見た壁の中の世界とはまるで違う。

「墓は……作ってやったのか？ 知り合い、だったんだろ？」

普段ならまず聞かない質問だった。しかし今のシャイルは、映像で中心街の世界を覗いたことで少し感覚に変化が起こっていた。

「墓？」

リゲルは驚いたようにしばし目を丸くして、

「死体漁り(スカベンジャー)の冗談にしちゃ中々うまいじゃねえか」

虫食いだらけの歯を見せた。

日は既に落ち、空から適当にばら撒(ま)いたように乱立するボロ小屋からは不安定に揺らぐ灯りが漏れている。

彼はあの後集落の近くで降ろしてもらい、こうして無事に家の近くへ帰り着くことが出来た。とはいえ結局、今日一日は徒労感を抱え込むだけに終わり、得られたものなどどこにも無かった。徒労感からいつもより背中を丸めて歩くようになった程度だ。

家の前に立ったところで、彼はわずかに目を見開いた。

元から若干ひび割れていた窓ガラスが丹念に全て割られ、閉じているように見えた扉も一度外されて立てかけられている。夜のため遠目には気付かなかったが、不在中に何者かに入られたのかもしれない。彼は警戒心を高め、中に足を踏み入れた。

「酷いな……」

ガラスやガラクタが散らばり、床には複数の人間が歩き回った足跡が残っている。出かけた時のままな箇所が見当たらないほど酷く荒らされ、数少ない家具類まで残らず解体されている念の入れようだ。

元から法の加護から外れた地であるために、こういったことは珍しくない。ここには法の代わりに自然に生まれた荒野の秩序があるものの、暗黙の了解に過ぎないし、外から来た人間を縛れるものではない。この荒れ具合を見るに、余程の無法者がやって来たのだろうと彼は推測した。

捨てるゴミ。使えるゴミ。置いておくゴミ。気怠(けだる)い体に喝を入れながら、荒れ切った部屋を片付けていく。使えないものは外に投げ捨て、比較的無事な家具を組み立て直す。作業が終わるのに大して時間はかからなかった。家具が減ってガラクタの比率が増えたが、質素で薄汚れているのは元からであるため、シャイルにとっては大した問題には感じられなかった。

今から食い物を買に行く気力の無かった彼は、ダクトテープで応急処置された椅子に慎重に腰を下ろし、壁際に積まれた保存食に手を伸ばし、そこで止まった。

「なんでまだ残ってるんだ……？」

外から来た無法者が荒らしていったとして、盗るべきは水と食料。散らばってはいたものの、数が減っているようには思えない。水が入っていた容器は空だが、床に染みが残っていることから盗まれたのではなくぶちまけられたのかもしれない。もしやと思い彼はもう一度家の中を隅々まで見分(けんぶん)してみた。

「何も盗まれてないのか？」

家の中自体は酷い有様で壊れたものも多かったが、持ち出されたものは何も無い。盗られるものなど元々ほとんど無いとしても、この荒野を生きる強盗なら真っ先に持って行くであろう水と食料には全く手を付けられていない。にも拘(か)わらず部屋は執拗(しつごう)に荒らされており、家具を全て解体するほどに徹底している。まるで何かを探しているかのように。

そこまで考えて、彼は首に下げた猫を咄(とつ)嗟(さ)に引っ掴む。

外を見る限り荒らされているのはこの家だけ。そして家からは何も持ち出されていない。つまりこの家にしかない何かを探しに来て、それが見つからなかったということだ。

心臓の鼓動が徐々に早まっていく。猫を握る手に力が籠(こ)もる。

考え過ぎかもしれない。薬物か何かの中毒者がたまたま家に来て、暴れて帰っただけという可能性もある。彼はそう自分に言い聞かせるが、回り始めた頭は悪い想像ばかりを膨らませる。

もし探しているのがこの猫だったら。これがビデオである以上用があるとしたら中身だろう。映像の日記は途中で終わっている。中に映っている大富豪の令嬢が、中心街ではなく人の立ち入らない瓦礫(がら)の中で骨になっていたのは何故か。

考えるほどに血の気が引いていく。根拠などどこにもないただの行き過ぎた推測に過ぎないと彼も思っている。だが、もしかしたらというひとかけらの不安が、それまで抱いていた寂寥(せきりょう)感や疲労感なんかを押し出すほどに急速に心の中で膨らんでいく。

この時、彼は少女の遺体を漁ったことを初めて後悔した。

怪しいものには手を付けない。それが経験から導き出した死体漁り(スカベンジャー)の掟だ。ならば、掟を破った者の末路は。

ただの泥棒ならば良かった。連中が欲しいのは食料や水、普遍的な財産だ。だがもしシャイルという個人に用がある連中なのだとしたら、一度や二度の失敗で諦(あきら)めたりせず、どこまでも追いかけて、いつかきっと殺してしまうだろう。では殺されたらどうなる。この世界に何が残る。思考を巡らせるにつれ、今まで散々扱ってきた死というものが、重みのある現実感を持って心の中を埋め尽くしていく。

震える指で、ネックレスを外す。

手の震えが伝わり、金属の猫が目の前をゆらゆらと揺れる。彼は途端にそれが恐ろしいものに思えてきて目を逸らそうとしたが、どうしても逸らせない。少し前までこれは彼に新しい世界を見せてくれる魔法の箱であったはずなのに、今や開けてはならない災厄の箱になってしまった。

「こいつを、捨てれば……」

まだ間に合うかもしれない。彼は気を取り直し、ネックレスを握り直す。藁(わら)をも掴む思いで必死に思考を巡らせる。

荒らした犯人は、疑いをかけてきてはいるだろうが結局現物が見つからずに家を後にしている。そしてその現物は今この手の中にあるのだから、これをどこかに捨ててしまえば、しらを切ってやり過ごすことも不可能ではない。そう、これを捨てて、全てを忘れて無かったことにしてしまえば……。

しかしそんな思考に反する様に、握った手を勝手に開き、指先で再び蓋を上げていく。緩んだ手のひらから、藁がすり抜けていくのを感じる。

捨てる。捨てるという選択肢は、取れない。

彼の顔には、知らず知らずのうちに変わってしまった自分に対し、自嘲するような笑みが浮かんでいた。

少し前、あの少女の遺体を見つける前の自分なら、もっと賢かっただろう。それで生き残る確率を上げることが出来るのなら、余計なことは考えず、このネックレスを迷わず捨てていたはずだ。こんな世界では生きるだけで精一杯で、だからそのためには何だってやってきたし、これからも何だってやるつもりだった。

だが今の自分はそうではない。彼女の見せてくれた世界の鮮烈さは未だ心を惹(ひ)きつけ、ずっと見守ってきたあの少女に対するある種の執着は、この期に及んで潰(つい)えることが無い。それは彼にとって、生きることに対して純粹であったかつてと比べて愚かな姿であるとすら言える。しかし、その愚かさを、彼は手放すことが出来ない。それに、未だ心の中に楔(くさび)のように残っている、死んだ彼女の何かを訴えかけるような虚(うつ)ろなまなざしに対して、彼はまだ何も答えられていない。己の身を案じてただ怯(おび)えるより、ずっとやるべきことがあるはずだ。

中心街の富豪の娘だったはずのレイは誰もいない瓦礫の中で骨となり、彼女の残した映像記録を探す何者かがこうして家を荒らしていった。かつて彼女の命を呑み込んだ何かは、今も動き続けているのだ。ならば自分がやることは何か。

指先は迷いなく動き、残り少ない日記の再生を始める。

* * *

『こんにちは。今日もこうして日記をつけるわね』

『特に何かすごいことがあったわけじゃないけれど、最近なんだか彼がコソコソしてるのが気になるわ』

『お姉ちゃんがお義兄さんに正式なプロポーズを受けたのが今の私より少し上の頃だったって聞くけど、もしかしたら……って期待しちゃうのはまだ早すぎるかしら？』

その後も話題を変えて取り留めも無い話が続いていく。まだ異常は無い。だが、直(じき)に何かが起こるはずだ。彼の確信は揺らぐことなく、何も見逃さぬように、投影される全てに目を配り続ける。日記はあとほんの少ししかないのだ。

* * *

その日の日記が撮影されたのは、彼女の部屋の中ではなかった。それ自体は珍しいことではない。広い屋敷の中を紹介して回ることもあったし、日記とは別に街中で友達と遊ぶ様子を撮影することもあった。

今回の場合は、父親が経営する企業、その実験施設の中だった。具体的には社で開発された発電装置の実験を行うための施設であり、新型の発電装置と無線送電を組み合わせたインフラシステムの本格的な稼働実験が始まることになっている。そしてレイは、この新たな電力事業の発表会に経営者の家族として出席する予定のため、今回は事前準備に訪れていたのだ。この施設は安全上の理由により中心街から離れた辺境地帯に建設されており、中心街の壁を越えることは彼女にとっては初めての経験になる。

とはいえやるべきことは当日の段取りを軽く説明される程度で、レイは暇を持て余して日記を撮影し始めたのだった。

実験施設内に急ごしらえで作られたゲストルームは清潔感こそあるものの、屋敷や本社ビルと比べ簡素な作りだ。革張りのソファにガラステーブルという応接セットの他には物もろくにない戸棚が据えられているのみであり、部屋の中に居るのもレイの他は姉のスフィルだけだった。

『確かカーレッド式大型融合炉？ が何とかって言う新素材のお陰で実用段階になって……技術はもう完成してた無線送電を組み合わせてどうこう……あと何だったかなあ……』

『あ、無線送電と言えば、このネックレスもここに来る前お父さんが電力の受信機を中に組み込んでくれたのよね。その内充電しなくても使えるようになるんだって楽しそうに言ってたわ。その内がいつ来るのか分かんないけど、流石にそんなに長い間これを使わないんじゃないかしら』

机に行儀悪く肘(ひじ)をついたレイが、目玉となるインフラシステムについて首を傾げながら話しているが、徐々に話が逸れていく。今回の技術に関しては先ほど社員から一応レクチャーを受けたのだが、実際のところ彼女は半分も理解できていない。その光景を映像として見ているシャイルに至っては、基礎的な教養の無さに加えてレイの説明が要領を得ないことも手伝い、ほとんど理解できていない。

そんなレイの後ろでは、姉が眉(み)間(けん)に皺を刻みながら台本を睨(にら)み付けている。今回の新事業の陣頭指揮を執っているのは彼女の夫、すなわちレイの義兄であるため、暇な妹と異なり発表会に向けて覚えるべきことが山ほどあるのだ、

『決めた！ ちょっと色々探検してくる』

そのうち、退屈に耐えかねたレイが立ち上がってドアへと歩いていく。姉に対しての言葉でもあったが、ブツブツ呟きながら部屋の隅を行ったり来たりする彼女には聞こえていないだろう。

『分からないことがあれば解説いたしますので、いつでも仰(うかが)ってくださいね』

彼女の横でそう言ったのは、この実験施設の男性社員だった。

彼は、お目付け役兼案内人であった。あくまで個人の日記とはいえ発表前の施設を撮影していいものか迷った彼女は中心街にいる父親に連絡したのだが、その結果として撮影可能な場所のみを案内する彼を同行させることを条件に許可を貰ったのだった、

『はあーい』

撮影しながら一人で気ままに探検するつもりだった彼女にとって、これは若干不本意な結果であった。

それからレイは、男に案内されながら施設内を巡る。人々が行き交うオペレータールーム、未だ調整が続く巨大な発電装置、発表会の際に実演される小型の発電モデルなど、部屋に投影される風景も次々と変わっていく。彼も何とか興味を持ってもらおうと必死に解説するが、専門的な話は彼女にとってやはり難しく、要領を得ない相(あい)槌(づち)を返すのみ。そんな不毛なやり取りを何度か繰り返した頃に、彼女はある部屋の前で足を止めた。

『ここ、カティアって書いてあるわね』

『ああ、ご存じありませんでしたか？ あの方もまた今回の事業に携わっておられるのですよ』

『それは知ってるけれど……』

『……入ってみますか？』

扉のプレートをまじまじと眺めるレイに、男が問いかける。

『いいの？』

『奥に入らなければ問題無いと、主任、カティアさんから既に許可は頂いています』

『そうなんだ！』

中心のレイと男が歩くと同時に、周囲に投影される部屋が切り替わる。オフィスは長机の周りに椅子が並ぶ会議室になっており、壁には生体ロックのかかった扉が一つ。仕事場は扉の奥のようだ。会議室には誰もおらず、本格稼働前の慌ただしさ故かファイルや書類、機器類などで若干散らかっている。

そんな部屋の中を、レイは物珍しげにきょろきょろしながら歩き回る。

『ここで彼が働いてるのね……。一人でこんな広い部屋を使ってるなんて、やっぱり頑張ってるわね!』

『ええ、デスクワークだけでなく作業現場にも頻繁に足を運んでおられるようで、頑張っておいでです』

その時、話を聞きながら辺りを見回していたレイは、机の上の何かに興味を示した。

『ねえ、これは何かしら？ チョーカーみたいで格好いいわね』

彼女は、一部が切れたような黒い輪を弄びながら問うた。

『それは……咽(いん)頭(とう)マイクですね』

男が、苦笑いしながらそう答えた。ご令嬢の好奇心は中々予測しづらい。

『喉の振動から喋る声を読み取って、補正をかけてイヤホンや拡声器などに送るものです。こういう書類仕事の場所と違って作業現場は騒音で声が聞こえづらいことがあるので、これを使って指示を伝えるんです』

『へえ……さっき現場に行くことも多いって言ってたものね……』

咽頭マイクをまじまじと見つめるレイに、男は声をかけた。

『着けてみますか?』

『いいの?』

『これはカティアさんの私物ではなく社の備品ですので、大丈夫だと思います』

単なる思い付きだったが、どうやら喜んでもらったようだ。金持ちのお嬢様の感覚はやはりよく分からないと、男は思った。

レイは説明を受けながら、上機嫌に咽頭マイクを装着する。その際に無造作に机にネックレスを置いたが、もしかしたら撮影していることを忘れていたのかもしれない。

そのまま会議室の簡易スピーカーに接続して声を出して遊んでいると、不意に彼女の後ろに人影が現れた。

『よく似合ってるよ、レイ』

突然の褒め言葉に、レイが弾かれたように振り向く。

『そのまま作業服を着て現場に行ってみるかい？ 君に指示を出されれば連中の士気も上がりそうだ』

そこに立っていたのは、レイの恋人にして今回の実験施設では主任を務めるカティアであった。奥のオフィスに続く扉にもたれる彼は、若い俳優のように様になった笑顔を浮かべている。

『カティア！ 居たの!?!』

『主任、いらしてたんですか』

『居なきゃ入室許可なんて出さないさ。これでも要人の部屋なんだよ?』

『もう！ 居たなら早く言ってくればよかったのに!』

レイは花咲く笑顔で彼に抱き着き、控えめな抱擁を交わした。

『すまない、ちょっと驚かしてみたくてね』

彼はそのまま咽頭マイクを外してやり、両肩に手を置いて向き直る。

『それより、ちゃんと端末持ってきてるかい?』

『端末……? あっ』

何かに思い至ったように、レイは自分の指を見てしばし固まる。彼女は二年前に指輪型の携帯端末を買ってもらったのだが、どうにもサイズに違和感があって外して使うことが多いため、よく忘れて出かけてしまうのだ。これもシャイルは日記の中で本人から聞いている。

『そんなことだろうと思ったよ。君のお姉さんが君を呼ぶために僕のところにひっきりなしにメッセージを送ってきてるんだ』

『あちゃあ……何かやっちゃったかしら……』

彼女とスフィルは仲の良い姉妹だが、性格の違いから喧嘩することも多い。大抵はきっちりした性格のスフィルをお転婆なレイが怒らせてしまうパターンだ。彼は似た光景を何度も映像で見ている。

『とにかく行っておいで。早く君を送り出さないと僕の端末がオーバーフローを起こしちゃうよ』

『そ、そうね！ また後で会いましょ！』

心当たりがあるのか無いのか、慌てた様子のレイが部屋を駆け出していく。案内役の男も置いていかれまいと後を追う。

映像の起点であるネックレスが机に置かれているためか、先ほどまで常に中心に位置していた彼女が外へ退場していき、投影される部屋は動かない。

『やれやれだな……』

カティアは遠く背中に手を振り終わると、ドアを閉めて施錠した。

部屋に静寂が訪れた。室内に彼以外の人間はおらず、その彼も少しすると奥のオフィスに入っていく。誰もいない部屋。全く動きの無い光景が、ひたすら投影される。

十分、二十分、三十分経ったところでシャイルは操作盤を呼び出した。彼が指を何度か動かすと、宙に浮かぶ時間表示が加速する。

彼は目を見開き、常に周囲に神経を張り巡らせる。さっきの映像では何も起きなかった。しかし残りの日記も数少ない。ならば今回こそ何かが起きるのかもしれない。単に異世界に耽溺(たんでき)するのではなく、現状に繋がる導火線を探り続ける。それが今やるべきただ一つのことだと、彼はそう信じていた。

早回しを始めてから数十秒、部屋の扉が突然開き、その瞬間彼は弾かれたように立ち上がり再生を再開した。

部屋に入って来たのは先の案内役より上等なスーツを着た男性。奥の部屋からはカティアが出てきて男を出迎える。特に問題の無い光景だ。彼は観察を続ける。

そのまま男は何かを話し始めた。専門用語が多く、学校に通ったことすら無い彼にはほとんど理解できなかったが、どうやら進捗(しんちよく)状況の報告であるようだった。これも特に問題の無い内容だ。彼は観察を続けようとしたが、次第に眉間に皺が寄っていく。何かがおかしい。話の内容が分からないのは元からだが、それにしても話がおかしな方向に向かっていくように感じたのだ。

『展示用発電モデルはどうなっている』

そう尋ねるカティアの表情は酷(こく)薄(はく)で、先ほどまでレイと会話していた優しい恋人はどこにもいない。とても同じ人物とは思えない雰囲気だった。

『既に最終調整は終了。現場にこちらの人間を紛れ込ませ、電磁容器の仕込みも終わっています』

『……やれるか？』

『はい、当初の予定通り試験場内は確実に。原因は計算外の過負荷になるでしょう。開発チームには悪いですが』

『なに、正式な発表が遅れるだけだ。事故のひとつやふたつ、社の力なら数年あればプロジェクトを再始動できるだろうさ』

『予備班も各所に配備済みですが、連中で大丈夫でしょうか』

『あれでいいんだ。あくまで保険に過ぎないし、壁の外側でやるなら虫どもを使った方が後始末も楽でいい』

シャイルは、レイの恋人であるこの男を信じていた。レイに信用されたこの男は、彼女の短い生涯の最後まで味方であり続けたのだと、そう思っていた。なのに、目の前で繰り広げられる会話はその望みを打ち砕いていく。膝(ひざ)に力が入らず、その場に蹲(うづくま)る。

『かしこまりました。……実行はやはり予定通りに？』

『今更怖気づいたか？ 予定通りでなくては無理だ。あの義兄殿はいい加減俺を疑ってきているからな。実演のタイミングを逃したら次は無いぞ』

『……失礼しました』

『まあいいさ。もうすぐ、もうすぐ全部手に入るんだ。俺が社を継ぐ立場になれば、恋人ごっこでガキの顔を窺ってきた日々も報われる時が来る……』

それから少し打ち合わせをした後、男は一礼して退室していった。カティアも奥のオフィスに戻り、再びの静寂。

シャイルはこの会話を聞いてしばらくの間、ただ茫(ぼう)然(ぜん)としていた。

彼にとって、そして恐らくレイにとっても信じがたい会話だった。今までこのネックレスが記録してきたどんなものよりも冷たく、悪意の漂う一瞬であった。まるで禁(きん)忌(き)に触れてしまったかのような感覚で、呼吸が浅くなる。

彼が生きる無法の荒野は常に死と隣り合わせにあり、物を奪うためなら殺しも厭(いと)わない連中だって珍しくない。ただ、それでも彼にとって、ここまで計画的に整えられた殺意を眼前にするのは初めての経験であった。

彼らは何を話していたのか、仕込みとは何か、予定とは何なのか、シャイルには難しいことは分からない。ただ、それが何か良くないこと、それも人の命に関わるであろうことは、実感として伝わってきた。

やっぱり関わらなければよかった。全部投げ出して、逃げてしまえばよかった。彼の持つ危機感がそうなり立てるのを、強引に理性でねじ伏せる。まだ何も終わってない。映像では何も起きてないし、電子の彼女も、現実の自分も、まだ生きている。己に言い聞かせるように、心の中で何度も唱える。

『やあ、こんなにすぐ再会できるとは思ってなかったよ』

『ごめんねいきなり。ここにネックレス忘れちゃって……あった！ マイクつけさせてもらった時に外したままになってたのね』

いつの間にか、部屋にはレイが入ってきていた。忘れ物に気付いて戻ってきたようだ。

『見つかってよかったね。大事なものなんだろう？』

『そうなの！ 誕生日プレゼントで貰(もら)ってね……』

そして少し言葉を交わした後、彼女は部屋から退出した。そしてつけっぱなしになっていた録画モードを切り、そこで映像は終了した。

部屋は元のあばら家に戻り、ネックレスの上には残り四つの映像ファイルが浮かんでいる。彼は、黙って次の再生を始める。

今回の日記は、短かった。

『どうしよう……はあ……』

投影されたのは、酷く憔悴(しょうすい)した様子のレイだった。先ほどまでの楽しそうな様子は欠片も残っていない。

場所は変わらず、実験施設のゲストルームだ。前回から時間もそこまで空いていないのだろう。今回スフィルは席を外しており、彼女一人だ。

彼女は何度もため息をつき、頭を掻(か)きむしる。無邪気で美しい少女の面影は消え失せ、目は酷く充血している。

自分を落ち着けるために深呼吸を繰り返す。そしてある程度平静を取り戻すと、ゆっくりと顔を上げた。目は伏せたままだ。

『信じられない……本当信じられないんだけど、とにかくあったことを全部話すわ。私自身整理するためにも……』

それから彼女は、嗚咽(おえつ)を堪(こら)えながら、つかえながら自分の見たものについて話した。彼女の見たもの、つまりは先ほどの映像だ。

カティアが次に会社を継ぐ存在である義兄を殺そうとしていること。その実行が発表会で発電モデルの事故という形で為(な)される予定であること。恋人としての彼が、演技だったこと。全て話し終えた後、彼女は再び机に突っ伏して泣き始めた。

『あの人が、あの優しい人がそんなことするなんて……！』

しゃくり上げる彼女をしばらく映してから、映像は終わった。

シャイルは終了と共に、絞り出すような息を吐く。ズキズキと、胃の奥から締め付けられるような息苦しい感覚だ。彼女は、きつともっと苦しい。ずっと守られてきた彼女にとって、あそこまで露(ろ)骨(こつ)な悪意を目の当たりにしたことなど無かったのではないだろうか。あんな計画を知ってしまって、そのままにしておくわけにもいかず、だからといって誰かに漏(も)らしてしまえば何が起こるか分からない。彼女はその苦しみを誰にも相談できず、自分以外見る者のいないこの日記に吐き出すしかなかったのだ。

様々な感情が絢(な)い交(ま)ぜになった、どろりとした名状しがたい衝動が心の奥底で流動するのを感じる。シャイルは今まで、この死んだ街で生きていくためにずっと心を抑え、動じぬよう殺してきた。だが今になって、そんな渴いた心のひび割れから忘れていたはずの激情が少しずつ滲(にじ)みだしてきているのだ。レイの世界との接触によるこの変容を、シャイルはまだ扱いあぐねている。

* * *

また、同じ部屋だ。部屋に彼女一人しかいないのも変わらない。ただ、彼女の纏(まと)う雰囲気は違った。もはや顔を伏せてはいない。

相変わらず目は真っ赤だ。髪も乱れ切っている。唇には血が滲(にじ)む。きつと何度も泣いて、何度も頭を抱えて、唇を噛み締めたのだろう。

裏切られる知り合いもない彼には、彼女の内側で吹き荒れたであろう激情を分かってやることは出来ない。いくら理解した気になっていても、結局のところ彼が見ることが出来るのは日記として切り取られた彼女の姿だけだ。それでも、彼女がたった一人苦しみにぬいて何かの決意を固めたことは、最大限汲(く)み取りたかった。

『……今までずっと未来の誰かに向けてやってきたけれど、本当に見る人なんているのかしらね』

『分からないけれど、ひょっとしたらこれからこのネックレスも誰かの手に渡ることになるのかも。そして、いい人が手に入れていることを祈るわ』

彼女は、自分を鼓(こ)舞(ぶ)する様に無理矢理口角を上げ、笑みを作る。これまで見てきた無邪気な笑顔とは似ても似つかない不自然なものだが、それは恐怖に屈しそうになる心に対しての精一杯の抵抗であった。

『ねえ未来の誰かさん。もし本当に居るなら見ていて。私、頑張るから。今は信用できるお姉ちゃんもお義兄さんも忙しくて会えなくて、通信もここからだとすぐにログが残っちゃうから、誰にも言えないの。誰にも言えないことだから、あなただけは私を見ていて。そしてその……もし、私が……』

彼女はしばし言い淀み、何かを吹っ切るように大きく息を吐いて、歯を食いしばった

『私が！ 私が失敗しても！ あなたは、あなたは私がやったことを覚えていて……』

ざり、と音がした。

彼は咄嗟にネックレスの蓋を閉め、握りしめたまま扉の傍(そば)に身を隠した。今のは足音、砂を踏んだ音だ。

少し待って何も来ないことが分かると、そのままゆっくり顔を出し、周囲を確認する。誰もいない。だが、砂の上には男のものと思しき足跡が一人分。

不在時の徹底的な家探しに、家の外にいた何者か。相手の正体ははっきり分かったわけではないが、少なくともまだ自分を狙っていることは確かだ。

頬を思い切り叩いて、気持ちを切り替える。

「……ここまでだな」

そこからの行動は早かった。

外出用の装備を整え、バックパックには残りの金に道具類など、必要最低限のものを詰め込む。寝台には一抱えのガラクタを載せ、上から布団代わりの襦袢布を被せる。子供じみた工作だが、今は一秒でも稼いでおきたい。そして最後にゴーグルとフィルター付きのマスクを着け、外(がい)套(とう)を身に纏う。普段はやらないような重装備だ。今から外に出ることを考えればこれでも心(こころ)許(もと)ないが、あるだけマシだ。

既に誰かが様子を見に来ている。時間はそう残されていない。

彼は扉には向かわず、壁の板を一部外して裏から外に出る。室内のランプは点けたまま。音も抑えて、かつ速やかに。

低い唸(うな)り声が、絶えず鼓膜を震わせる。この小型輸送機は静音性が売りだが、飛行していなくても内部ではエンジンの唸りが常に鳴り響いており、静寂とは程遠い。中古で買った後にそこそこ快適な居住スペースを設えたはいいものの、内部の騒音対策もしておくべきだったとカティアは後悔していた。

輸送機の窓の外には、地虫たちの粗末な小屋の向こうに中心街の綺(き)羅(ら)星(ぼし)が見える。カティアは、専用シートに身を沈めてぼんやりとその光景を眺める。

カティアはこの夜景が好きだ。あの街では絶えず新しい建築が行われており、その度に光が増える。誰もが未来を見て日々を生きており、過去の影は強烈な電子の光にかき消され省みる者などいない。あの街は未来の象徴なのだ。

外では雇った仕事屋たちが例の死体漁り(スカベンジャー)を探し回っているが、小屋から逃げられたきりめばしい報告は上がってきていない。あの死体漁り(スカベンジャー)は、いや、奴が持つネックレスのデータは、過去の象徴だ。

かつてカティアは、あの光の半分を掌(しょう)握(あく)する寸前まで登り詰めた。手段を選ばず自力で出世していき、創業者一族に取り入ろうと必死で媚(こび)を売り、次女の婚約相手にまで至ることが出来た。後は少々強引にでも義兄に退いてもらい年老いた義父の死をゆっくり待てば、同族経営のあの会社なら社長の地位が約束されたも同然だった。義兄がやたらと勤(きん)の良い男だったために野心に気付かれて警戒されてしまったのは予想外だったが、結局、強硬手段に出る隙は残されていたのだからそれはまだ大した問題ではない。

歯車が狂ったその発端は、件(くだん)の次女、レイ・A・カーレッド。決して頭の良い女ではなかったから、恋人として気に入られるのは難しくなかった。しかし、彼女が使っていたネックレス型のホロカメラをオフィスに忘れて密談が記録されたことから、全てが始まる。この忘れ物に気付かなかったことが、最大にして最悪のミスだったと、カティアは考えている。

録画されていた可能性に思い至った時には既に彼女は記録を確認していたようで、酷く警戒されてしまっていた。せめて彼女が外に連絡を取ったり身内以外の誰かに相談したりしていれば、どこかでカティアの情報網に引っ掛かり彼女を捕捉することも出来ただろう。だが彼女はそれを選択せず、一人で行動を起こした。結果として、予定に無い緊急点検が行われたことによって仕込みが露(ろ)見(けん)、彼女はデータを持ったまま逃走。まさに最悪の状況だ。仕込みからカティア自身にまで辿(たど)られることはなかったが、当時雇っていた壁の外の連中がレイを取り逃がしたせいで、彼女が持ったデータは見つからずじまい。発表会で披露するはずだった発電モデルに仕込まれた致命的な欠陥に、次女の失踪。はっきりした証拠が無くとも、義兄がカティアを遠ざけるには十分だった。

それからの日々は、急転直下を地で行くものだった。本社に直接関わることの出来ない部署に回され、婚約相手が失踪した以上あの一族との繋がりも消え失せた。昼は与えられた当たり障りのない役職をただこなし、夜はそれまでの積み重ねがふいになった絶望から酒に溺れた。脳をアルコールで浸し泥のように眠る度に、自身の過去を秘めたあのデータがふらりと表に出る夢を見て飛び起きる毎日を送った。中心街の電源を半分握る大企業の、次期社長の殺人未遂と次女の失踪。その二つの事件との関連が表(おもて)沙(ざ)汰(た)になれば厳罰どころではない。今度こそ全てを失うだろう。

さらに最悪なことに、あの義兄は縁が切れた今になってもなおカティアに対する疑いを深めているようで、今まで何度もこちらに探りを入れてきている。どこまで真相に近づいているかは分からないが、時間が経てば経つほど追い詰められてしまうであろうことはカティアにも分かった。

故に、今回の発見はカティアにとって天から与えられた機会なのだ。ここでデータを見つけて始末すれば、自分を追い続ける過去をようやく焼き尽くせる。ここまで大きく動いた以上は義兄に気取られている

恐れも大きいのが、最終的にデータさえどうにか出来れば十分取り繕(つくろ)うことは出来るだろう。だから、彼は何があってもあの死体漁り(スカベンジャー)を見つけなくてはならない。

屋台や小屋が掲げるかがり火やランプのみが灯りを点す荒野の夜。月を遮(さえぎ)る灰色の雲の下を、黒い影が走る。影は廃墟やバラック小屋の間を隠れるように駆け抜ける。

「ひとまず、どこかに身を隠さない」と

継(つ)ぎ接(は)ぎだらけの薄汚れた外套は砂によく馴染み、日の落ちた暗い砂地では彼の格好は隠れるのに適している。ただでさえ危険なこの地では夜に出歩くことなど全く無かったために、今になって初めて気付いたことだった。相手がどこからどんな方法で監視しているかも分からないが、今は夜に紛れるしか方法が無い。

影はしばらく砂の上を走り、人の住む場所から若干離れた場所に建つ廃墟に潜り込む。ここは周囲に他の建物が少なく、外から中が見えづらい構造をしているため、普段の探索でもたまたま休憩や潜伏に使っているのだ。

廃墟の中は暗く、灯りが無ければまともに動けない。だが外のわずかな月明りすら入らないということは中の光も漏れにくいということであり、それは今やるべきことを考えればむしろ好都合である。

シャイルは切れかけのペンライトで照らしながら廃墟の中を進み、なるべく奥まったところで座り込む。ここなら多少光ったところで外から見える危険もないはずだ。

そして外套で上を覆ってからネックレスの電源を入れる。追われている状況でやるべきではないのは分かっているが、これを後回しにするわけにはいかなかった。既に引き返せないところまで来ている自覚はある。だからこそ、一度関わると決めたレイのことも、ちゃんと見届けなくてはならない。今も心の中で、骨と化した彼女の眼窩はこちらを見つめている。

彼はそのまま操作を続け、残り二つとなった日記を再生する。それまでは部屋全体に風景を投影していたが、今度はレンズの上に映像が箱庭のように縮小表示される省電力モードを設定。どこから見られているか分からない現状を考えての選択だ。

薄く光る箱庭に投影されているのは、鋼鉄の蛇が幾(いく)重(え)にも絡まった、城のような巨大な機械。後日の発表会で用いられる展示用の発電モデルである。広大な地下試験場に鎮座するこのモデルは、新たなインフラシステムを始点から末端まで屋内の試験場内で再現するためのものであり、発表会での説明に使われる予定なのだ。最終調整を既に終えたこともあり、周囲に人は少ない。

レイはその機械の前で、作業服を着た男と対(たい)峙(じ)していた。

『それで……異音、ですか？』

『はい、この前案内してもらった時に、あの機械のところで変な音がした気がしたんです。金属が軋むみたいだ』

『電磁容器の辺りですか……』

男は怪(け)訝(げん)な表情をしながら首を傾げる。当然だ、このモデルは既に万全のチェックを終えているし、そもそも機械から出ている音が異音かどうかなど素人に判断がつかはずがないのだ。だから彼女は、もうひと押しを試みる。

『カティアに会った時にも言ったんですけど、あの人もそれは確かに気になるなって』

『そうか……主任が……』

男は眉根(まゆね)を寄せて何やら考え込む。

間近に控えている発表会は社外に向けたものであり、失敗など許されるものではない。既に行った検査では確かに何の問題も無かったが、ちゃんと為された報告を無視したことでもし事故でも起こってしまったら、責任は誰が取るのか。しかもその報告は地位の高い主任にも行っている以上、聞かなかったことに

も出来ない。それに、素人の言葉とはいえ本番を前にして不安材料はひとつでも減らしておきたいのは事実。男の脳は、幾つもの打算の末に、結論を弾き出す。

『わかりました。では私からも担当のスタッフにちょっと話してみます』

『ありがとうございます！ お役に立てていればいいんですが』

彼女はにこやかに別れを告げ、試験場を立ち去る。取り繕った笑顔は即座に剥がれ落ち、緊張した面持ちが現れ出る。やれるだけやってみたが、上手くいくかは未知数だ。後は、創業者一族の娘という自分の立場と、上司であるカティアの名前がどれほど重く受け止められたかにかかっている。ちょっとした会話に過ぎないが、それは彼女のやれる最大のことで、目的のために考え付く最適な選択でもあった。

成功していれば、これで点検が行われることになるだろう。映像の中で言われていた仕込みが何なのかは詳しくないのでよく分からないが、この点検で見つかるものであればいいと、レイは祈った。

『誰かがついてきてる』

施設の廊下を歩きながら、レイが小声で呟く。試験場から出て少し経った頃であった。本格稼働を目前にした実験施設内なのだから多くの人々が行き交っているのは当然であるが、妙についてくる者たちがいると彼女は感じていた。彼らの服装はこの施設で用いられる作業服と寸分違わないが、雰囲気はどうもおかしい。

彼女は何となく疑っているに過ぎないが、傍から映像を見ているシャイルは一目で気付いた。彼らは野生の獣のように貪欲な雰囲気を纏いながら、その瞳は渴いた砂漠のように虚ろだ。シャイルと同じ、壁の外で地に這って生きる人間の目だ。

施設の端になるに従って周囲の人間は少なくなっていき、彼女が歩く速度は次第に増していく。追手はもはやろくに取り繕うこともせず、小走りについてきている。

『どこに行っても追ってくる……！』

彼女は焦っていた。人の多いところに行こうが施設の端に行こうが、必ずどこかに彼らがいる。施錠できる部屋に逃げ込んだところで、彼らの上にカティアが居るならきっと本人がその権限を用いて正面から迎えに来るだろう。そうなれば彼女の身も抑えられて一巻の終わりだ。彼らがそこまでして求めているのは、彼女自身以上に、恐らくネックレスだ。記録されてしまった密談が他の誰かに知られれば、カティアは失脚してしまうだろう。彼女も、薄々そのことは勘付いていた。

『施設の中がダメなら……』

レイは、止められた車の影で息を潜めていた。顔だけ出して覗(のぞ)いてみれば、施設の入り口付近で作業服の男たちがうろついているのが見えた。彼らの中には、黒光りする金属を手を持つ者さえいる。どうやらもう、手段を選ぶつもりもないらしい。

当初彼女は、少しだけ施設の外に出て中心街の父親と連絡を取るか、義兄の仕事がひと段落ついて直接会える時間になるまで近場で潜伏するつもりだった。その予定も最初は上手くいっていた。突然走り出し、人ごみやエレベーター等を使って男たちを一時的に振り切って外に出たまではよかった。しかし、結局施設を出たところで近場では端末の電波が未だ施設の制約下にあり、彼らの搜索の手は施設の外にも及ぼうとしている。

これでは戻ることも出来ない。このままずっとここに潜んでいれば、搜索の範囲が広がっていずれ見つかってしまうことになるだろう。それを避けたければ、より遠くに逃げるしかない。

『はあ……きつつい……』

レイは小言で弱音を吐いた。そもそも彼女はハウスダストのアレルギーを患うほどに清潔な環境で育ってきた箱入り娘であるため、このような砂と埃が構成要素のほとんどを占める荒地にいること自体が酷いストレスなのだ。こればかりは、砂にまみれて生きてきたシャイルでは察することが出来ない苦しみである。

『どっかに、新しく隠れなきゃ』

そう考えて見回すと、遠くの方に剣山のようなものが視界に入る。よく見てみると、破壊されて残骸の山となり果てた廃墟群のようだった。少し離れているけれど、隠れるには最適な場所に思えた。

近くで見るとより大きい。まさにそそり立つ岩山に見える。だが材質はコンクリートで、建物だった頃の面影もかすかに残っているようだ。

後ろを向けば、遠くに砂煙が立っているのが見える。恐らく車かバイク。ここに来るまでに見つかってしまったのだろう。ここまでの距離も決して短くはなかった上に身を隠す遮(しや)蔽(へい)物(ぶつ)も少なく、そうなるのも当然の結果と言える。とにかく、これでは追いつかれるのも時間の問題だ。

『よっぽどこのネックレスが欲しいのね……』

ならばなおさら逃げなくてはならない。このコンクリートと鉄くずの溪谷に身を潜めて、やり過ごしたら信用できる人間にこれを渡すのだ。彼女は壊れないようにネックレスの蓋を閉め、手頃なヒビに足をかけた。

映像が終わった。シャイルは何も言わずに電源を切って、再び首にかける。まだ日記は一日分残っているが、一所に長居するべきではない。彼は手早く荷物をまとめ、廃墟を後にした。

長居できないというのもそうだが、何より映像の中で、もう彼女はあの溪谷に辿り着いてしまっている。シャイルが彼女の遺体を見つけたあの場所だ。彼女は知ってしまった企みに対して手を打ち、やるべきことは既に成し遂げた。後に待っているのは、物語の終わりだ。

ならば彼女のネックレスを受け継いだ自分も、やるべきことをやらなくてはならない。未だ心に残る彼女の虚ろなまなざしに、正面から向き合おう。数十年前に途絶えた彼女の決意を、ようやく完遂させるのだ。シャイルがこれから向かう場所は、既に決まっていた。

ボロ小屋の中はガラクタやそれらを収納する棚で溢れており、クリップやピンで固定された紙束が各所を飾っている。いつもと異なるのは、壁の内側に隙間無く布が張ってあるところか。

床の物を踏まないように慎重に足を進めると、鼻をつく臭いが漂ってきた。その方向に目を向けると、積み上がる鉄くずの上に胡坐(あぐら)をかき、煙管(きせる)を咥(くわ)えた老人。彼の唯一の取引相手、ジャンク屋だ。

「昼に、俺のところまで来たぞ。探し物をしている、良い服着た連中がな」

老人は、こちらを見ずに突然話しかけてきた。

「その探し物と同じ出どころのブツを俺が扱ってたみたいでな、持ってきた奴を教えろって言うもんだから、俺はてめえを売ったよ」

恨むなよ、と老人は呟(つぶや)いた。

男はゴーグルとマスクを外してその場に座り込む。

「構わない。あの後結構派手に金を使ったからな、どのみち他所からバレてたさ」

老人は何も言わない。ただぷかりとひとつ煙を吐いて、その煙が薄れて消えていく様をぼんやりと見つめた。ガタついた家屋を、風がしきりに揺らしている。風が強くなってきた。

「……てめえは用も無いのに俺のところへ転がり込んだのか」

その言葉を受けて男は改めて老人に向き直り、深く皺の刻まれた横顔に話しかける。

「取引をしたいんだ」

「取引？」

老人は驚いたように目を見開き、初めて男の方を見た。

「ああ、売りたいものがある」

老人、すなわちジャンク屋のボロ小屋から少し離れた地点を、再び男が歩いている。今度は走らず屈まず身を隠さず、外套の襟(えり)をかき合わせて顔を隠すこともしない。遮る物の無い荒野を、背筋を伸ばして堂々と歩く。もう十分隠れた。これ以上は必要ない。

「来るなら来い……！」

市場、住宅街、工業地帯の残骸が視界を通り過ぎていく。周囲には一切目を向けずに、ただ前を向いて進む。そうして瓦礫で出来た剣山の群れ、最初にレイの亡骸を見つけたあの地帯に差し掛かったところで、突如巨大な影が彼の姿を覆った。

青年が出ていった小屋の中で、老人が一人座り込んでいる。手元には小ぶりのサイズの、昔ながらの箱型情報端末。旧式のものだが、この辺りで通信設備を所有するのはこの老人だけだ。ここでは辺境とはいえ中心街からまだ使える機器類が流れてくるのがたまにあるが、そうしたものの多くはこの老人のようにある程度の力や財を持つ者の元に自然と集まってくる。この枯れた大地にしがみついた人々のほとんどは貧しい生活を送っており、彼らは生きた機材を手に入れたとしても、わざわざ活用するより明日の食事のために二束三文で売ってしまうのだ。この端末もその一つであり、様々な設備を独占するこの老人は、掲げる看板通りのジャンク売買に限らず幅広い商売に手を出している。

そしてその端末の中に入っているのは映像データ。先ほどシャイルが売ったのは、首から下げていたネックレスの中身、そのコピーだった。はっきり言って、本体ならともかくこんなデータなど商品にもならない。しかし金の代わりにシャイルが求めたのは、このデータは壁の中に売るという約束。老人は壁の中にもコネクションがあるが、だからといって釣り合う取引ではない。だが、老人は承諾した。

普段ならこんな取引はやるはずがない。金にならないものを押し付けられて売る先まで決められたのでは、ただの伝達であって取引ですらない。しかしシャイルは言ったのだ。ただ生きるよりもやりたいことを見つけた、と。この死体の街で、そのようなことを言える者は滅多にいない。老人は長い間ここに暮らして多くの人間たちを見てきたが、そんな者はその中に居たかどうか。居たとしてもジャンクに埋もれて記憶の彼方だ。大抵はこの地から見上げる空のように濁った目で、ただ目先の世界を生きている。あの青年自身も、この前まではその一人であったはずだ。彼に何があったかなど大雑把にしか聞いていない。だがその変化は、この老人が痛む腰を上げる理由としては十分なものであった。

ここを出て行って、あの青年は今頃どうしているだろうか。ジャンク屋の老人は、幼い頃から見てきた死体漁り(スカベンジャー)の行く末をふと案じた。しかし途端に馬鹿馬鹿しく思えてきて、思案は煙管の灰と一緒に床へ叩き落とす。あれをわざわざ心配してやることもないだろう。ああいう馬鹿のやりそうなことなど大概予想がつく。

「この俺に尻拭いまでやらせるんじゃないぞ、クソガキめ」

流線形の巨大な影が、わずかな駆動音と共にゆっくりと降下してくる。二枚の大きな羽を持ったその影は全体的に黒を基調としているが、あまりに鮮やかかつ光沢を持った黒色は却(かえ)って夜闇に浮いて見える。かつては中央街の警備隊に小型人員輸送機として用いられていたが、現在この機体は民間人に払い下げられている。

それはシャイルの目の前で地面ギリギリまで高度を下げると、排気音と共に黒い壁が四角く切り取られ、大きな獣の舌のように金属のタラップが降ろされた。

清潔なタラップが硬質的な悲鳴を上げ、複数の男たちが砂まみれの大地に降り立った。うち一人はスーツを着た中年程の太った男で、後はみな軍服のような装いをした大柄な男たちだった。

太った男は他の者たちに守られるようにして中心に立ち、眼前の青年を睨み付けている。対して青年は崩れかけた廃墟の頂点に腰かけ、今にも落ちてしまいそうだ。

「ようやく見つけたぞ死体漁り(スカベンジャー)！」

太った男は唾を散らしながら怒鳴り上げる。青年は全く気圧されることもなく、わずかに口角を吊り上げた。

「遅かったなカティア・ガシェー。昔よりだいぶ太ったじゃないか」

カティアは何度か瞬(まばた)きを繰り返して、青年の言葉をようやく理解すると不愉快そうに顔を歪めた。

「貴様……やはりアレを持っているな？ 中身を見たんだな……！」

「まあな、ところでその後はちゃんと社長に就任できたのか？」

その言葉を聞くと同時に、カティアの眉間の皺が一層深くなった。だが何かに思い当たったように少し考え、逆に笑みすら浮かべて見せる。

「俺にとってはあれが最後のチャンスでな、結局捕まっちゃいないが完全に疑われて左遷だ。あの家族との繋がりも無くなってもう十年以上は元義兄殿、現社長の顔を肉眼で見てねえ」

先ほどまで怒りを露わにしていたはずのカティアは、打って変わって今はニヤニヤと笑みを浮かべたまま喋り続ける。

「だから俺はもう今を見ることにしてな、今いるところから登り詰めて、ここで手に入る全てをモノにしてやるって頭を切り替えたんだ。実に健康的な上昇志向だとは思わんか」

「欲深さは変わらないみたいだな」

シャイルは感情を表に出すことなく、会話を続ける。付け入る隙が見えぬように余裕を繕い、対等に向き合う必要がある。

「人間は欲の生き物さ。だがそのためにもあの女のデータが邪魔でな、あの日からずっと探してたんだ。あれが世に出れば今度こそ俺がどうなっちゃうか分からん。それがまさか貴様のような虫けらが持ち歩いているとは思わなかったが、こうして見つかったんだからイラつくどころか喜ばしいくらいだ。間に合ってたよ」

カティアはシャイルの座る廃墟に歩み寄りながら語り掛ける。ゴーグルの奥にあるシャイルの目が細められ、カティアのさらに向こうに視線を移す。少し早いか。

風が強い。風は地面を這い回る砂を巻き上げ、染みひとつ無かったスーツを汚していく。まだ、足りない。

「お前はずっと怯(おび)えてたわけだな。データを持って逃げたあの子の影を」

その挑発的な言葉に対しても、カティアの表情は崩れない。何を言われたところで、今この状況における優位が揺らぐことはないのだ。

「怯える……？ ああ、認めてやる。確かに俺は今までずっとあの女が怖くて仕方がなかった。だがそれも今日までだ。俺はようやく幽霊の尻尾を掴んだんだ」

カティアはさらに一歩進み、男たちは再び彼を囲むように並ぶ。それを横目で確認するとカティアは笑みを深め、声を張り上げた。

「なあ、取引しようぜ！ 貴様ら死体漁り(スカベンジャー)が大好きなゴミの売買さ！」

「……………何が言いたい」

「シンプルだ。そいつを渡してくれりゃあ、金をやる。IDまではくれてやれんが、萎(しな)びたジャンク屋には出せねえ金額を渡してやる」

「断る」

シャイルは即断した。彼が今持っているのはレイの過去であり、彼女の精一杯の抗(あらが)いそのものだ。彼女の勇気も、抗いも、全て受け継ぎ背負うのが、彼女の亡骸から遺志を拾い上げた自分の使命だと、そう決めていた。

「そうかい。まあ別にいいさ。どちらにしろ長年の懸念事項が無くなるのは変わらんからな」

カティアが手を振ると、今まで待機していた男たちが動き出し、シャイルの座る廃墟の前に並んだ。そのうち何人かは拳銃と思しき物体を手をしている。

一瞬で青年と男たちの中の空気が突けば破裂しそうなほどに張り詰め、マスクで隠れた青年の頬にじわりと汗が滲む。もう少し、もう少しだけ粘れないか。

「小僧、貴様が持っているのは俺の過去だ。貴様がいなくなれば、俺はようやく自由になれる。新しい未来を歩むことが出来るんだ」

カティアが、懐から出した拳銃をゆっくりと青年に向ける。その顔はもはや笑っていない。

「無駄だ。過去は消えない」

「今消してやる……」

合図と共に、幾つもの黒い銃口がシャイルの視界に映る。ジリジリと焼け付くように、死がこちらを向いているのを感じる。

怖くないと言えば嘘になる。表面上は平静を保っているが頭の中ではずっと危険信号が鳴りっぱなしで、外套に隠れた手足は自分の体とは思えないほどに震えている。

「あの女は死んだ……お前で終わりだ！」

だが、後悔はしていない。それだけは、揺らいでいない。だから、シャイルは吼(ほ)えた。

「俺がここで死んでも、どれだけ時間がかかっても、あの子は！ 　いつか必ずお前に追いつくぞ！」

突如、目の前が真っ暗になった。

轟(ごう)音(おん)。爆風。衝撃。皮膚が露(ろ)出(しゆつ)した箇(か)所(しよ)がヤスリ掛けされたかのような苦痛が走り、服の中まで細かく鋭い痛みが体中を暴れ回る。世界がひっくり返る衝撃の中で、体が無力な木の葉のように翻(ほん)弄(ろう)される。さらに、衝撃の到達にわずかに遅れて幾筋もの閃光が走った。

轟音が収まると共に、暗闇が薄まり周囲が開けていく。先ほど銃を構えていた男たちは苦痛にのたうち回っており、それはカティアも例外ではなかった。

「ぐう……！」

目が痛い。いや、体中が痛い。口の中はおろか喉(のど)にまで砂が行き渡っているのを感じる。苦痛を堪えながら無理矢理薄目を開けると、両手が隙(すき)間(ま)無く細かい傷で覆われている。そして、喉に詰まった砂の感触に吐き気を催し、胃液ごと砂を吐き出した。しばらく蹲(うずくま)りながら咳き込んで、ようやく立ち上がった。

「何が……何が起きた……」

立ち上がると共に、スーツにまとわりついた大量の砂が流れ落ちる。服の下もくまなく砂が入り込んでおり、まるでさっきまで砂漠に埋められていたかのような有様だ。

そして傷だらけの手で目をこすり、周囲を見渡した。未だ風が強く空気は黄色に染まっているが、同じく砂にまみれた男たちが苦しんでいるのが目に入る。今のは、砂嵐か。

「そうだ！ 　奴はどうなった！」

はっとして見上げると、そこにはあの死体漁り(スカベンジャー)の影も形も無い。混乱に乗じて逃げ出したか。ショックの残る頭を再稼働させて、カティアは部下に指示を飛ばす。

「ガキを探せ！ 　死んでても構わん！」

男たちは呻(うめ)きながら立ち上がり、瓦礫をよじ登って搜索を始めた。だが強風自体は今も吹き続けているため、巻き上げられた砂が常に体力を奪い続ける。砂嵐によって被った疲労や傷、そして険しい岩山のような地形も加え、作業は思うように進まない。

カティアによって雇われた彼らも、今回の仕事が辺境の砂地であることは分かっていた。だからある程度の砂対策はしてあるし、多少のトラブルには対処できるつもりだった。だが、この地で突発的に起こる猛烈な砂嵐についてはまでは、あくまで壁の中の仕事屋である彼らには予想できなかったのだ。また、死体漁り(スカベンジャー)一人を始末するだけの仕事で本格的な砂漠装備など必要ないと考えていたことも、今回の惨(さん)状(じょう)を引き起こす遠(えん)因(いん)となった。

「クソッ！ 　高い金出して雇ったんだぞ……野良犬の一匹くらい見つけてみせろ！」

カティアは苛立っていた。今回こそは万全を期してと辺境の虫どもではなく信頼できる仕事屋を雇ったのにこれだ。この砂地にこんな突然の災害があるなど聞いていなかった。もしかしたら前回同様現地人を使っていれば違っただろうかという考えも頭を過(よぎ)るが、もしもの話をしても仕方がない。まずは現状を何とかしなければ。

「輸送機を飛ばせ！ 　空から探すぞ！」

未だ続く強風の中で怒鳴るが、機内から出てきた砂まみれのパイロットは首を横に振る。扉が開けたままだったせいで内部にまで砂嵐が入り込み、とても今すぐ飛ばせる状態ではないというのだ。

「ふざけるな！ 　こんな時に使えねえゴミめ！」

毒づくカティアはジャケットを脱ぎ捨て、自ら太った体を揺らして瓦礫に挑み始めた。

もはや後が無いのだ。あのデータが壁の中に持ち込まれてしまえば、今度こそ全てを失ってしまう。かつての失敗を振り切ってこれから新しく成功を取めようというのに、あれの処分にまた失敗してしまえば、今度こそ己の過去の影に怯えながら一生を過ごすことになるだろう。それに、少し前に部下から伝えられた情報が正しければ、こちらの今回の動きを見て既に義兄が手勢を動かしているとのことだった。もう時間は幾分も残されていないだろう。だからカティアはここで諦めるわけにはいかない。どんなことをしても、あの死体漁り(スカベンジャー)を誰より早く見つけなければならないのだ。

「はあ……はあ……」

シャイルは荒い息を整えながら、瓦礫の影に身を隠す。向こうからわずかに怒号が聞こえるが、ある程度距離は離れたはずだ。彼はその場に座り込み、呼吸が落ち着くと共にフィルターが目詰まりを起こしたマスクを剥(む)いで捨てた。

あの砂嵐は、予測できていた。前兆としてこのところ西からの風がどんどん強くなってきていて、近日中に来るだろうとは現地の人間ならば分かっていた。一方ジャンク屋から聞いた限りでは追手は壁の中から来た人間らしく、砂嵐にまでは対応し切れないだろうと考えた。だから、相手の初動が遅れる砂嵐に乗じて逃走する予定だった。

しかし、いくら予測できるとはいえその日のどの時間に来るかまでは分からず、タイミングのいい到来を期待するなど分の悪い賭けにしてもお粗末に過ぎる。彼自身その自覚はあったが、あの場で死ぬ覚悟のあった彼にとってはお粗末でも構わなかった。安全策を取ってただ逃げるより、カティア本人と対峙して、彼女の言えなかったことを直接言ってやる方が大切だったのだ。

だがそれももう終わった。賭けは奇跡的に上手くいき、連中がこの場所まで辿り着くには当分かかるだろう。何より、体中が痛い。出来る限り装備を整えたとはいえ、あんな寄せ集めで砂嵐に立ち向かうのは流石に無理があったのだ。

そう考えながらその場に腰を下ろすと、足元に何やらぬるりとした水たまりが出来ている。渴きという言葉を実感したようなこの地で水たまりなんて一体、何故。

「あ、俺……」

撃たれてるんだ、と初めて気付いた。思い出してみれば、砂嵐の中で身を翻(ひるがえ)す際に、連中が苦し紛れに撃った閃光が走っていた。その思考に呼応するように、体の各所が酷く熱を持っているように感じてきた。だが、予想していたほどの痛みではない。興奮して感じていくくなっているのか、それとも視界を染める砂煙は感覚まで鈍らせるのか。ただ、力が上手く入らないだけだ。

ちやり、と指先に金属が触れた。どこを撃たれたのかと体をまさぐっている時のことだった。痛む体を軋ませながら取り出すと、猫の飾りがついたシルバーのネックレス。レイの日記が記録されている、カティアが大勢雇ってまで欲しがったものだ。今やその中でも重要なデータはコピーされて、ジャンク屋の元にある。無茶を承知で頼み込み、売りつけたのだ。どういう方法を取るかは任せたが、約束通りならいずれ壁の向こうにいる誰かにこのデータを売ってくれるはずだ。先ほどのカティアとの対峙やこの逃避行も、そのために注意を集めて時間稼ぎを行う意味が強かった。

何となく手で弄び、蓋を開ける。中央の水晶から映像が投影され、日付の入った四角い画像が空中に並べられた。これまで何度となく見てきた光景だ。

「そういえば……最後のは、まだだった」

外からはまだ怒号が時折聞こえるが、声が近づく様子はない。しらみつぶしに探しているようだが、ここまではまだ時間がかかるはずだ。最後の日記を見るのなら、今かもしれない。普通なら追われている最中にやることではないが、彼女から受け継いだことは既に遂げたために、心情としては彼自身意外なほど落ち着いていた。

震える指で操作すると、水晶の真上に小さな箱庭が投影される。流石に逃亡中であることを考慮して、全体を小さく表示する省電力モードだ。音量も最低限。再生が始まる。

箱庭に投影されたのは、細かいコンクリートの碎片が転がった広い空間。光源はネックレス自身が放つものとひび割れた天井から降り注ぐわずかな外の光のみで、部屋は薄暗い。まだ天井が崩落せずに残って

いるが、もしかしたら彼女の亡骸を見つけたあの地下室なのかもしれない。未だ強風によって砂が舞っているため、はっきりとは分からないが。

箱庭の中心には、人形のように座り込む一人の少女。砂が入り込んで投影の調子が悪いのか、いつもよりノイズが酷く、時折その姿がぶれる。だが彼女がレイなのは分かった。間違えようがない。ずっと見てきたのだ。

『こんにちは、未来の誰かさん……お元気？ 私は、微妙ね……』

力無く笑う彼女の頬は煤で汚れ、お気に入りだった薄いピンクのワンピースは細かい傷や汚れにまみれている。

『何とか逃げてきて、瓦礫の隙間から広いところを見つけたからこうしてじっと隠れているのだけれど……いえ、動けなくなっただけというのが正解ね……』

彼女は話しながらも苦しげに身じろぎをし、その度に床に赤い線が増えていく。どうやら体中に深い傷を負っているようだった。履いていたミュールは既に脱げ、そこら中が切り裂かれた薄いタイツの足裏は赤く染まっている。地元の間人ですら近寄らないような陰しい廃墟群に、整地された道しか歩いたことのないような少女が飛び込んだのだ。ここまで辿り着いただけでも運が良かったと言えるだろう。

それに、この岩山は自然の岩ではなく廃墟の成れの果てなのだ。飛び出した鉄筋や金属の残骸など、危険は至る所に潜んでいる。加えて、カティアが差し向けた追手に彼女を無傷で捕まえようとする配慮があったとは思えない。実際に何があったのかは記録されていないが、その逃亡劇の壮絶さは彼女の体に直接刻まれている。

『誰かがこれを手にする日が来たら……って言ってたけど、本当にそうなりそう……。ねえ、あなたはちゃんと私のことを見てくれた？』

レイは、酷く疲(ひ)弊(へい)してなお、その場にいない者に語り掛ける。孤独に大人の悪意と戦い、追われて摩耗した精神は、誰かに話しかけるといって紛らわせなければ、もはや生きる気力を保つことも出来ない。

「……見てるよ」

掠れた声が、自然とこぼれる。誰かと話していなければ意識を保てないのは、シャイルも同様だった。それに、似たような状況で死に瀕(ひん)してようやく、彼女と自分は同じ世界に生きているのだと感じられる。届くはずもないけれど、数十年前に虚(こ)空(くう)に消えた彼女の問いかけに答えを返してやりたいと、臍氣(おぼろげ)な頭でそう考えた。

『あなたは、これを見てるあなたはどんな人なのかしら……？』

『そうだ、私あなたのことが知りたいわ……！ どんな名前で、どんな生活で……』

増える口数は、彼女が内心で抱く焦りの表れだ。彼女は、背後に迫る死の気配を感じ取っているのだ。

「俺は……シャイルだ。それで俺は、」

それで、そこから何も言えなかった。シャイルは彼女のことなら色々なことを知っている。だが自分は、自分について語ることが無い。毎日ただ生きて、死体を漁って、そんな乾燥した日々をどう言えいいのか、まるで見当もつかない。自分が何をして、何を考えて生きてきたかなんて気にしたこともなかった。自分が彼女に憧れた部分で、自分と彼女の決定的な違いがそこにあるのだ。そんなことに、この状況になってやっと気付いた。

たった一人で瓦礫に隠れる少女は、答えを待たずに喋り始める。

『ねえ、私すごく頑張ったわ……お義兄さんの命を助けたのよ……』

「分かってる、全部見てた……」

問いかけに簡単な、それでいて心からの返事を返す。そうしなければ、不安げにノイズ混じりの輪(りん)郭(かく)が揺らぐ彼女は、今にも消えてしまいそうだった。

『カティアに裏切られたのはショックだったけど、私、恋人って存在に浮かれてたのかもね……』

「……仕方がない」

『でもね、彼の企みも阻止して、一番欲しがってるはずのこの日記も、持って逃げてやった……』

「ああ、奴もずっと君に怯えていた」

『もし見てる人がいるなら、この日記を誰かに届けて……あいつはまだ、捕まってないと思うから……』

「もう終わるよ……やっと」

彼女が託した過去を、ようやく終わらせることが出来た。それだけは、シャイルがここまで生きていて唯一誇れることだった。

レイは震える声を抑え、息を吐いて上を向く。

『ねえ、なんだか目が霞んできたわ……もう、よく見えないの……』

かける言葉が見つからない。シャイルは既に、彼女の末路を見ている。彼女は、過去の人間なのだ。

『私、お姉ちゃんとは喧嘩したつきりだし、お父さんもお母さんとも会いたかった……』

『嫌だなあ……』

レイの汚れた頬を、水滴が滑る。落ちた涙の幻は、地面に染み込むことなく消えていく。

『もう、疲れちゃった……』

消耗し切ったレイはもう座っていることすら出来ず、ゆっくりと体を横たえる。シャイルは咄嗟に彼女の近くに行こうとした。もう、体が動かない。

『ねえ……あなたはそこに居る……？ まだ、見てる……？』

掠れた声で、彼女が問いかける。もはや意識もはっきりしていないのだろう、半開きの目は虚ろだ。

「居るよ……ずっと居る……」

彼女を真似て、シャイルもその場に横たわる。いや、真似たのではなく、もう座ってもいられないのだ。

空を見上げると、既に風は弱まり、舞う砂も減っている。

遠くの方から、徐々に夜の闇が薄らいできている。彼と彼女の上に、朧(おぼろ)な光が差し込んだ。

朝が、来る。

『えーっと……俺の名はシャイルだ。死体漁り(スカベンジャー)をやってた。今は……今は、別の仕事をしてる』

『それで、その、慣れないけど、今日から日記をつけていく』

『正直話すことなんて無いけど、無理してでも何か話そうと思う』

『そうすればきっと、何も無い砂漠の毎日でも、少しはマシに見えてくるかもしれない。もしかしたら、俺も生きた証を誰かに残せるのかもしれない』

『だから、その、なんだ……』

『……今回は、ここまでにする』

『また、明日だ』